

南相馬市内遺跡発掘調査報告書12

—平成29年度試掘調査報告—

真野古墳群A地区		大富西畑遺跡	(1次調査)
東町遺跡	(4次調査)	東迫遺跡	(1次調査)
八幡林遺跡	(16次調査)	小高城跡	(5次調査)
上根沢原畑遺跡	(1次調査)	浦尻貝塚	(14次調査)
鷺内遺跡	(5次調査)	原町区深野入竜田地区	
梨木下西館跡	(4次調査)	池ノ沢遺跡	(1次調査)
四ツ栗遺跡	(2次調査)	泉官衙遺跡	(25次調査)
比丘尼沢B遺跡	(1次調査)	片草貝塚	(1次調査)
小高区神山長畑地区		高見町B遺跡	(5次調査)
北明内遺跡	(2次調査)	上根沢原畑遺跡	(3次調査)
上根沢原畑遺跡	(2次調査)	八幡林遺跡	(17次調査)

平成31年3月
南相馬市教育委員会

南相馬市内遺跡発掘調査報告書12

—平成29年度試掘調査報告—

真野古墳群A地区		大富西畑遺跡	(1次調査)
東町遺跡	(4次調査)	東迫遺跡	(1次調査)
八幡林遺跡	(16次調査)	小高城跡	(5次調査)
上根沢原畑遺跡	(1次調査)	浦尻貝塚	(14次調査)
鷺内遺跡	(5次調査)	原町区深野入竜田地区	
梨木下西館跡	(4次調査)	池ノ沢遺跡	(1次調査)
四ツ栗遺跡	(2次調査)	泉官衙遺跡	(25次調査)
比丘尼沢B遺跡	(1次調査)	片草貝塚	(1次調査)
小高区神山長畑地区		高見町B遺跡	(5次調査)
北明内遺跡	(2次調査)	上根沢原畑遺跡	(3次調査)
上根沢原畑遺跡	(2次調査)	八幡林遺跡	(17次調査)

平成31年3月
南相馬市教育委員会

序 文

文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産です。地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展、そして地域のアイデンティティ形成の根幹をなすものです。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができない先人の生活の様子や、文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

南相馬市内では、東日本大震災からの復旧・復興に伴う工事をはじめ、数多くの開発行為が行われており、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財を保護することが必要となっています。このような状況のなか、教育委員会では、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施いたしました。開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡の保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

また、国史跡などの重要な価値を持つ遺跡の、適切な保存と幅広い活用を図るための調査を実施いたしました。平成 29 年度は、浦尻貝塚の範囲確認調査および真野古墳群における地形測量調査を行い、今後、史跡の保存や活用を進めるうえで、貴重な成果を得ることができました。

本書は、平成 29 年度に文部科学省の補助金の交付を得て実施した南相馬市内遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめた報告書です。今後、これら埋蔵文化財の調査成果が文化財の保護や地域研究ために活用されることを祈念します。

結びに、試掘調査の実施にご協力賜りました地権者の皆様、および関係機関の皆様、加えて震災復旧、復興にご支援、ご尽力頂きました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成 31 年 3 月

南相馬市教育委員会
教育長 大和田 博之

例 言

1. 本書に記載した内容は、平成29年度に南相馬市教育委員会が実施した南相馬市内の埋蔵文化財
試掘調査、発掘調査の成果報告である。
2. 試掘調査・発掘調査等にかかる経費は、文部科学省補助金の交付を得ている。
3. 発掘調査ならびに報告書刊行は、以下の体制で実施した。
 - ・調査期間 平成29年4月1日～平成30年3月30日
 - ・整理期間 平成29年4月1日～平成31年3月29日
 - ・調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会

平成29年度

教育長	阿部 貞 康	主任文化財主事	藤 木 海
事務局長	木村 浩 之	主任文化財主事	佐 川 久
文化財課長	堀 耕 平	主 査	林 紘太郎
文化財係長	川 田 強	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩 (嘱託)
主 査	佐 藤 友 之	埋蔵文化財調査員	小 椋 紗貴江 (嘱託)
主任文化財主事	荒 淑 人		

平成30年度

教育長	大和田 博 行	主任文化財主事	佐 川 久
事務局長	木村 浩 之	主 査	林 紘太郎
文化財課長	堀 耕 平	主任文化財主事	佐 藤 友 之
文化財係長	川 田 強	埋蔵文化財調査員	濱 須 脩 (嘱託)
主 査	荒 淑 人	埋蔵文化財調査員	小 椋 紗貴江 (嘱託)
主任文化財主事	藤 木 海		

整理補助員 赤石澤真子・泉田あずさ・岩崎美和子・太田 雅彦・岡田 光生・寺島 千尋・渡部 定子

4. 平成29・30年度には、福島県教育委員会からの市町村技術支援により、以下の職員からの支援を受けた。
 - ・平成29年度 高 橋 保 雄 (新潟県支援)
 - 加 藤 学 (新潟県支援)
 - ・平成30年度 藤 田 祐 (青森県支援)
5. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。
小川勝市・富田忠男・椀澤芳治・門馬誠一・南相馬川房発電合同会社・昭和運輸株式会社
株式会社東北地質・佐藤 誠・株式会社彩葉・株式会社日建・志賀拓弥・藤田直己・佐藤大樹・

- 佐藤智子・杉 三男・菅野則子・株式会社伏見材木店・菊地良昭・菊地聖華（順不同 敬称略）
6. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。
文化庁文化財部記念物課・福島県教育委員会・公益法人福島県文化振興財団・福島県立博物館
高田昌幸・木村裕之・轡田克史・岡部睦美・山本友紀・吉野滋夫・香川慎一（福島県教育委員会）、
武田寛生（静岡県派遣）、最上法聖・藤田 祐（青森県派遣）、高橋保雄・佐藤友子・
加藤 学（新潟県派遣）、堀口智彦（埼玉県派遣）、渡瀬健太（兵庫県派遣）、斉木 巖（兵庫県神戸市支援）、
門脇秀典（公益法人福島県文化振興財団）（順不同 敬称略）
 7. 本報告書に掲載した文章ならびに挿図・写真図版は調査担当者が執筆・作成し、最終的な編集は各担当者と協議して林が行った。
 8. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水糸レベルは海拔高度を示す。
2. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。
T：トレンチ、SI：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SD：溝跡、SK：土坑、SE：井戸、P：ピット、SX：
性格不明遺構 K：攪乱、L：基本層位、 \emptyset ：遺構内層位
3. 調査区位置図作成に使用した□は調査区を示し、白塗りは遺構未確認調査区、黒塗りは遺構確認調査区を示す。

目 次

序 文	i
例 言	iii
凡 例	iv
目 次	v
挿図目次	vi
写真目次	vii
表 目 次	viii

第Ⅰ章 南相馬市を取り巻く環境

第1節 遺跡を取り巻く環境

第1項 地 理 的 環 境	1
第2項 歴 史 的 環 境	1

第Ⅱ章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

第1項 平成29年度試掘調査の概要	5
-------------------	-------	---

第Ⅲ章 調査成果

第1節 平成29年度試掘調査成果

第1項 真野古墳群A地区	9
第2項 東町遺跡（4次調査）	11
第3項 八幡林遺跡（16次調査）	13
第4項 上根沢原畑遺跡（1次調査）	14
第5項 鷺内遺跡（5次調査）	15
第6項 梨木下西館跡（4次調査）	16
第7項 四ツ栗遺跡（2次調査）	18
第8項 比丘尼沢B遺跡（1次調査）	19
第9項 小高区神山長畑地区	21
第10項 北明内遺跡（2次調査）	22
第11項 上根沢原畑遺跡（2次調査）	23
第12項 大富西畑遺跡（1次調査）	24
第13項 東迫遺跡（1次調査）	25
第14項 小高城跡（5次調査）	27
第15項 浦尻貝塚（14次調査）	28

第16項	原町区深野入竜田地区	43
第17項	池ノ沢遺跡（1次調査）	44
第18項	泉官衙遺跡（25次調査）	46
第19項	片草貝塚（1次調査）	47
第20項	高見町B遺跡（5次調査）	56
第21項	上根沢原畑遺跡（3次調査）	57
第22項	八幡林遺跡（17次調査）	59
報告書抄録		
奥付		

挿 図 目 次

図 1	南相馬市位置図	1	図 30	小高城跡位置図	27
図 2	主要遺跡位置図	4	図 31	調査区位置図	27
図 3	調査遺跡位置図	7	図 32	浦尻貝塚位置図	28
図 4	真野古墳群A地区現況地形図	10	図 33	調査区位置図	29
図 5	東町遺跡位置図	11	図 34	1 T 平面図・断面図	31
図 6	調査区位置図	11	図 35	2 T 平面図・断面図	32
図 7	遺構配置図	11	図 36	7 T・8 T 平面図・断面図	33
図 8	八幡林遺跡位置図	13	図 37	10 T・11 T・12 T 平面図	34
図 9	調査区位置図	13	図 38	15 T・16 T 平面図・断面図	36
図 10	上根沢原畑遺跡位置図	14	図 39	遺構分布図	37
図 11	調査区位置図	14	図 40	浦尻貝塚14次調査出土遺物	41
図 12	鷲内遺跡位置図	15	図 41	深野入竜田地区位置図	43
図 13	調査区位置図	15	図 42	調査区位置図	43
図 14	梨木下西館跡位置図	16	図 43	池ノ沢遺跡位置図	44
図 15	調査区位置図	16	図 44	調査区位置図	44
図 16	四ツ栗遺跡位置図	18	図 45	泉官衙遺跡位置図	46
図 17	調査区位置図	18	図 46	調査区位置図	46
図 18	比丘尼沢B遺跡位置図	19	図 47	片草貝塚位置図	47
図 19	調査区位置図	19	図 48	調査区位置図	47
図 20	神山長畑地区位置図	21	図 49	1 T 南壁面土層断面図	49
図 21	調査区位置図	21	図 50	片草貝塚1次調査出土遺物（1）	52
図 22	北明内遺跡位置図	22	図 51	片草貝塚1次調査出土遺物（2）	53
図 23	調査区位置図	22	図 52	高見町B遺跡位置図	56
図 24	上根沢原畑遺跡位置図	23	図 53	調査区位置図	56
図 25	調査区位置図	23	図 54	上根沢原畑遺跡位置図	57
図 26	大富西畑遺跡位置図	24	図 55	調査区位置図	57
図 27	調査区位置図	24	図 56	八幡林遺跡位置図	59
図 28	東迫遺跡位置図	25	図 57	調査区位置図と古墳の分布	60
図 29	調査区位置図	25			

写真目次

東町遺跡4次調査

写真1	1 T調査状況	12
写真2	1 T土層断面	12
写真3	作業状況	12
写真4	2 T調査状況	12
写真5	2 T S I 1 検出状況	12
写真6	2 T土層断面	12

八幡林遺跡16次調査

写真7	1 T調査状況	13
写真8	2 T調査状況	13

上根沢原畑遺跡1次調査

写真9	調査前状況	14
写真10	1 T調査状況	14

鷺内遺跡5次調査

写真11	2 T S I 1 検出状況	15
------	----------------	----

梨木下西館跡4次調査

写真12	調査前状況	17
写真13	1 T調査状況	17
写真14	1 T S I 1 検出状況	17
写真15	1 T S I 2・3 検出状況	17
写真16	1 Tピット検出状況	17
写真17	2 T調査状況	17
写真18	2 T S I 4 検出状況	17
写真19	2 Tピット検出状況	17

四ツ栗遺跡2次調査

写真20	1 T調査状況	18
写真21	2 T調査状況	18

比丘尼沢B遺跡1次調査

写真22	調査区遠景	20
写真23	調査前状況	20
写真24	1 T木炭窯跡検出状況	20
写真25	4 T木炭窯跡検出状況	20
写真26	5 T木炭窯跡検出状況	20
写真27	6 T木炭窯跡検出状況	20
写真28	13 T木炭窯跡土層断面	20
写真29	13 T木炭焼成坑検出状況	20

小高区神山長畑地区

写真30	1 T調査状況	21
写真31	5 T調査状況	21

北明内遺跡2次調査

写真32	調査状況	22
写真33	3 T調査状況	22

上根沢原畑遺跡2次調査

写真34	1 T調査状況	23
写真35	2 T調査状況	23

大富西畑遺跡1次調査

写真36	1 T調査状況	24
写真37	2 T調査状況	24

東迫遺跡1次調査

写真38	1 T黒色土検出状況	26
写真39	10 T調査状況	26
写真40	10 T木炭窯跡検出状況	26
写真41	13 T製鉄炉跡検出状況	26
写真42	13 T 1号製鉄炉跡検出状況	26
写真43	13 T 2号製鉄炉跡検出状況	26

小高城跡5次調査

写真44	調査前状況	27
写真45	1 T調査状況	27

浦尻貝塚14次調査

写真46	調査前状況(西から)	38
写真47	1 T調査状況	38
写真48	1 T土層断面	38
写真49	1 T土層断面	38
写真50	2 T調査状況	38
写真51	2 T-S K 1・S K 2	38
写真52	7 T調査状況	38
写真53	8 T調査状況	39
写真54	10 T調査状況	39
写真55	10 T-S I 2 調査状況	39
写真56	11 T調査状況	39
写真57	11 T-S I 5 調査状況	39
写真58	12 T調査状況	39
写真59	12 T-S X 1 調査状況	39
写真60	15 T調査状況	40
写真61	15 T土層断面	40
写真62	15 T土層断面	40
写真63	16 T調査状況	40
写真64	16 T土層断面	40
写真65	16 T土層断面	40
写真66	浦尻貝塚14次調査出土遺物	42

原町区深野入竜田地区

写真67	1 T調査状況	43
写真68	1 T調査状況	43

池ノ沢遺跡1次調査

写真69	8 T調査状況	45
写真70	7 T廃滓場検出状況	45
写真71	12 T製鉄炉跡検出状況	45
写真72	44 T調査状況	45
写真73	44 T廃滓場検出状況	45
写真74	47 T調査状況	45

泉官衙遺跡25次調査

写真75	1 T調査状況	46
写真76	1 T S I 1 検出状況	46

片草貝塚 1 次調査

写真77 調査前状況全景（東から撮影）……………54
写真78 1 T 調査状況（北東から撮影）……………54
写真79 1 T 調査状況（北西から撮影）……………54
写真80 1 T 遺物出土状況（東から撮影）……………54
写真81 1 T 調査状況（東から撮影）……………54
写真82 1 T LIV-12層観察（北から撮影）……………54
写真83 1 T LIV-22層観察（北から撮影）……………54
写真84 片草貝塚出土遺物……………55

高見町B遺跡 5 次調査

写真85 1 T 調査状況……………56
写真86 土層断面……………56

上根沢原畑遺跡 3 次調査

写真87 調査区近景……………58
写真88 重機掘削状況……………58
写真89 1 T 調査状況……………58
写真90 1 T 土層断面……………58
写真91 2 T 調査状況……………58
写真92 2 T 土層断面……………58
写真93 3 T 調査状況……………58
写真94 3 T 土層断面……………58

八幡林遺跡17次調査

写真95 調査前状況……………60
写真96 1 T 調査状況……………60
写真97 2 T 調査状況（古墳周溝検出状況）……………60

表 目 次

表 1 南相馬市主要遺跡一覧表…………… 3

表 2 南相馬市埋蔵文化財調査遺跡一覧…………… 6

第 I 章 南相馬市を取り巻く環境

第 1 節 遺跡を取り巻く環境

第 1 項 地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境としては、北側は相馬市、南側は双葉郡浪江町、西側は相馬郡飯館村と接する。

浜通り地方の地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉断層（岩沼－久之浜構造線）により明瞭に区分される。

市内の地形を見ると、西部域に南北方向に連なる阿武隈高地が縦走し、そこから太平洋に向かって派生する低丘陵と丘陵間に開析された沖積平野で構成される。阿武隈高地にかかる西側の丘陵の標高は100～150mを測り、海岸部に近い市内中心付近では標高50～60m前後、海岸部では20～30mとなる。



図 1 南相馬市位置図

第 2 項 歴史的環境

南相馬市内に所在する旧石器時代の遺跡としては、大谷地遺跡(1)・畦原A遺跡(2)・畦原C遺跡(3)・熊下遺跡(4)・袖原A遺跡(5)・陣ヶ崎A遺跡(6)・南町遺跡(7)・橋本町A遺跡(8)・橋本町B遺跡(9)・桜井遺跡(10)、荻原遺跡(11)の11遺跡があり、後期旧石器時代のナイフ形石器や彫刻刀型石器を出土している。

縄文時代の遺跡では、宮後A遺跡(12)・宮後B遺跡(13)から大木7a～10式、八幡林遺跡(14)では早期から晩期までの土器が出土する。八重米坂A遺跡(15)・羽山B遺跡(16)・畦原F遺跡(17)では早期から前期の遺構・遺物が確認されており、赤沼遺跡(18)・犬這遺跡(19)でも前期の土器が出土している。中期では阿武隈高地裾部にある前田遺跡(20)や、新田川北岸の台地上にある高松遺跡(21)で大木7b～10式、植松A遺跡(22)で大木10式期の住居跡が調査されている。

太田川流域の上ノ内遺跡(23)・町川原遺跡(24)では後期の綱取式が出土し、片倉の羽山遺跡(25)では晩期の大洞C1～A式、高見町A遺跡(26)では晩期中葉の土器と石囲炉をもつ住居跡が調査されている。宮田貝塚(27)・加賀後貝塚(28)・片草貝塚(29)は内陸部に位置する貝塚を伴う前期前半の集落である。前期後半以降には海岸部にある浦尻貝塚(30)や角部内南台貝塚(31)が代表的な貝塚として知られている。

弥生時代としては天神沢遺跡(32)や桜井遺跡(33)が著名であるが、近年では桜井古墳(34)

や川内迫B遺跡群F地点(35)で中期中葉の榊形囲式土器が出土し、高見町A遺跡からは終末期の十王台式土器が出土している。

古墳時代では、古墳時代前期に新田川南岸の河岸段丘上に桜井古墳が築造され、周辺の古墳と共に桜井古墳群上渋佐支群(36)・同高見町支群(37)を構成する。真野川流域の柚原古墳群(38)では周溝内から塩釜式土器が出土し、高見町A遺跡・桜井B遺跡(39)・東広畑B遺跡(40)でも塩釜式土器が出土している。前方後円墳である上ノ内前田古墳(41)は中期の可能性があり、真野古墳群(42)・横手古墳群(43)は円筒埴輪を伴うことから、その造営開始は中期末まで遡る可能性がある。この時期の集落は前屋敷遺跡(44)で南小泉式土器を出土する竪穴住居跡が調査されている。後期になると桜井古墳群高見町支群・真野古墳群・横手古墳群などで本格的に古墳群の造営が開始される。真野古墳群は100基を超える東北地方を代表する後期群集墳である。後期の集落としては大六天遺跡(45)・迎畑遺跡(46)・地藏堂B遺跡(47)、片草古墳群一里段支群(48)・中村平遺跡(49)で後期から終末期の土器が出土する。終末期の横穴墓のうち大窪横穴墓群(50)・羽山横穴墓群(51)、浪岩横穴墓群(52)は玄室内部に装飾壁画が見られ、真野川流域の中谷地横穴墓群は(53)複室構造の玄室を採用している。

奈良・平安時代の遺跡では行方郡家とされる泉官衙遺跡(泉廃寺跡)(54)があり、郡庁院・正倉院・館院などが確認されている。横手廃寺跡(55)・真野古城跡(56)・植松廃寺跡(57)・入道迫瓦窯跡(58)、京塚沢瓦窯跡(59)・犬這瓦窯跡(60)などは瓦を出土する遺跡であり、寺院や瓦を焼成した遺跡と考えられる。市内の低丘陵では製鉄に関連した遺跡が多数確認されており、金沢製鉄遺跡群(61)、蛭沢遺跡(62)・川内迫B遺跡群・出口遺跡(63)・大塚遺跡(64)・横大道遺跡・館越遺跡などで調査が進展している。集落遺跡では広畑遺跡(65)を始めとして市内各地で確認されているが、集落の具体的な構造を知るまでには至っていない。広畑遺跡からは「寺」「厨」などの墨書土器とともに灰釉陶器が出土し、隣接する泉官衙遺跡との関連が示唆される。大六天遺跡から出土した「小毅殿千之」と刻書された須恵器は、行方軍団との関わりが。町川原遺跡でも墨書土器が出土しているが、広畑遺跡のような公的機関の施設名を記したものは見られず、異なった性格をもつ集落と考えられる。

主な中世の遺跡としては城館跡が挙げられ、下総国から下向した相馬氏の最初の居城となる別所館跡(66 現太田神社)や牛越城跡(67)は、相馬氏下向以前の城館跡として良く知られている。小高城跡(68 現小高神社)は相馬氏の居城として機能した中世城館である。本城跡は嘉暦元年から慶長十六年に相馬利胤が中村城を築城するまでの約290年間重要な役割を占めた。その他では泉平館跡(69)・泉館跡(70)・下北高平館跡(71)で調査が行われている。

近世の遺構は、寛文六年以降に築かれた野馬土手と、その出入口となる木戸跡や相馬氏の居城として再整備された牛越城跡がある。野馬土手は、雲雀ヶ原扇状地を囲む、東西約10km×南北約2.6kmの範囲に築かれており、土手内外の出入り口となった羽山岳の木戸跡(72)は南相馬市指定史跡に指定され、良好な形で保存されている。近世後半から近代にかけては中村藩の大規模なたたらである馬場鉄山(73)や正福寺跡(74)、法懂寺跡(75)で近世墓域の調査が行われている。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	八幡林遺跡	散布地	旧石器・縄文	41	上ノ内前田古墳	古墳	古墳
2	畦原A遺跡	散布地	旧石器	42	真野古墳群	古墳	古墳
3	畦原C遺跡	散布地	旧石器	43	横手古墳群	古墳	古墳
4	熊下遺跡	散布地	旧石器	44	前屋敷遺跡	集落・散布地	縄文～古墳
5	袖原A遺跡	散布地	旧石器	45	大六天遺跡	集落・散布地	古墳～平安
6	陣ヶ崎A遺跡	散布地	旧石器	46	迎畑遺跡	集落・散布地	古墳
7	南町遺跡	散布地	旧石器	47	地藏堂B遺跡	集落・散布地	古墳
8	橋本町A遺跡	散布地	旧石器	48	片草古墳群 一里段支群	古墳・集落	古墳～平安
9	橋本町B遺跡	散布地	旧石器	49	中村平遺跡	集落・散布地	古墳
10	桜井遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・弥生 古墳・奈良・平安	50	大窪横穴墓群	横穴墓	古墳
11	荻原遺跡	散布地・製鉄跡	旧石器・奈良・平安	51	羽山横穴墓群	横穴墓	古墳
12	宮後A遺跡	集落・散布地	縄文	52	浪岩横穴墓群	横穴墓	古墳
13	宮後B遺跡	集落・散布地	縄文	53	中谷地横穴墓群	横穴墓	古墳
14	八幡林遺跡	散布地	旧石器・縄文	54	泉官衙遺跡	官衙	奈良・平安
15	八重米坂A遺跡	集落・散布地	縄文	55	横手廃寺跡	寺院	平安
16	羽山B遺跡	集落・散布地	縄文	56	真野古城跡	城館	不明
17	畦原F遺跡	住落・散布地	縄文	57	植松廃寺跡	寺院	奈良・平安
18	赤沼遺跡	集落・散布地	縄文	58	入道迫瓦窯跡	窯跡	奈良・平安
19	犬這遺跡	散布地	縄文	59	京塚沢瓦窯跡	窯跡・製鉄	奈良・平安
20	前田遺跡	散布地	縄文	60	金沢製鉄遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
21	高松遺跡	散布地	縄文	61	蛭沢遺跡	製鉄	奈良・平安
22	植松A遺跡	集落・散布地	縄文	62	川内迫B遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安
23	上ノ内遺跡	散布地	縄文	63	出口遺跡	製鉄	平安
24	町川原遺跡	集落・散布地	縄文	64	大塚遺跡	製鉄	平安
25	羽山遺跡	集落・散布地	縄文	65	広畑遺跡	集落・散布地	奈良・平安
26	高見町A遺跡	集落・散布地	縄文～平安	66	別所館跡	城館	中世
27	宮田貝塚	貝塚・散布地	縄文	67	牛越城跡	城館	中世
28	加賀後貝塚	貝塚・散布地	縄文	68	小高城跡	城館	中世
29	片草貝塚	貝塚・散布地	縄文	69	泉平館跡	城館・散布地	中世
30	浦尻貝塚	貝塚・散布地	縄文・平安	70	泉館跡	城館	中世
31	角部内南台貝塚	貝塚・散布地	縄文	71	下北高平館跡	城館	中世
32	天神沢遺跡	散布地	弥生	72	羽山岳の木戸跡	その他	近世
33	桜井遺跡	散布地・集落	旧石器・縄文・弥生・ 古墳・奈良・平安	73	馬場鉄山	製鉄	近世
34	桜井古墳	古墳	古墳	74	正福寺跡	寺院	近世
35	川内迫B遺跡群	製鉄・散布地	弥生・奈良・平安	75	法幢寺跡	寺院・集落	奈良・平安・近世
36	桜井古墳群 上洪佐支群	古墳・散布地	縄文～平安				
37	桜井古墳群 高見町支群	古墳・集落	縄文～古墳				
38	袖原古墳群	古墳	古墳				
39	桜井B遺跡	集落・散布地	弥生・平安				
40	東広畑遺跡	集落・散布地	弥生～平安				

表 1 南相馬市主要遺跡一覧表

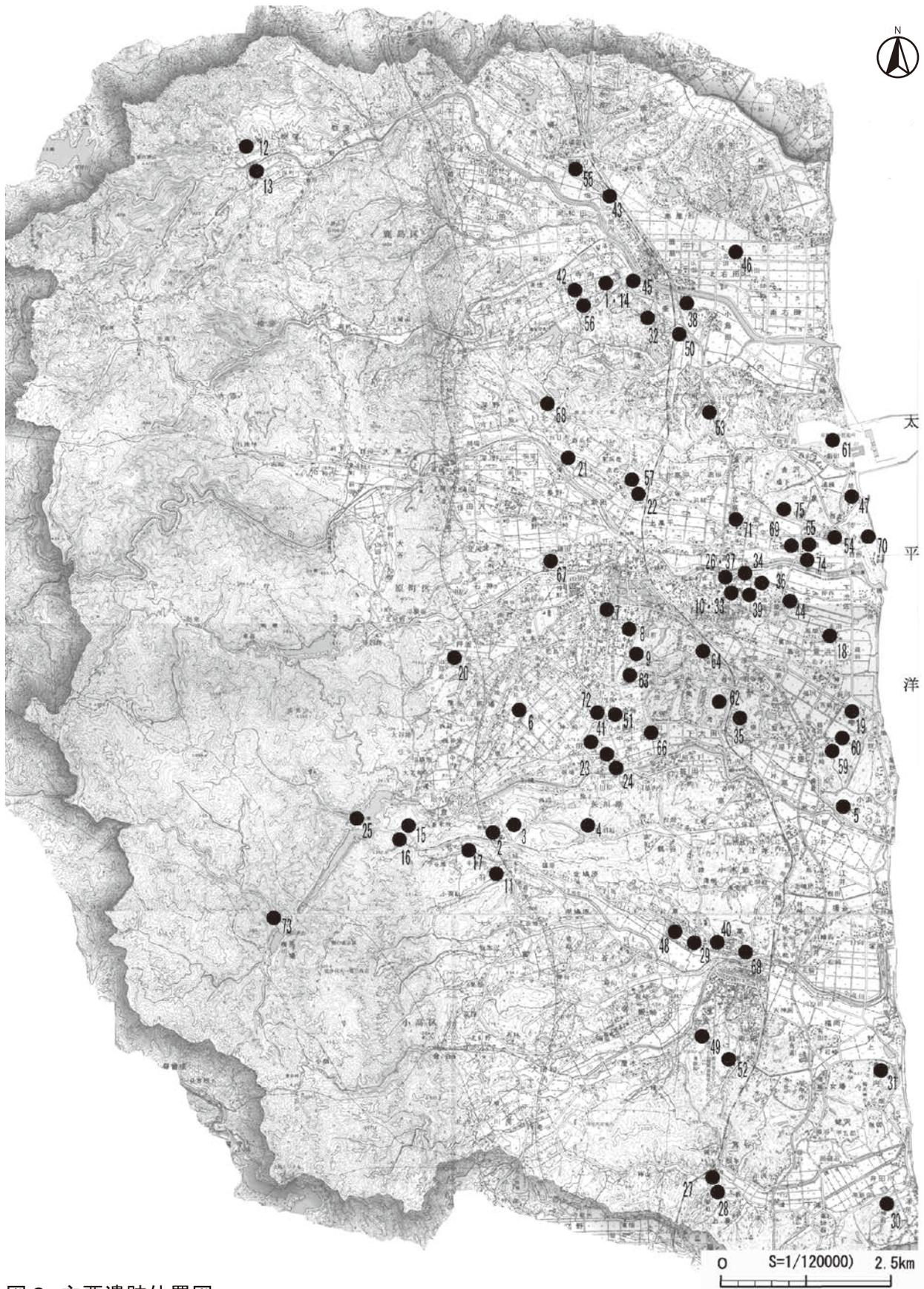


圖2 主要遺跡位置圖

第Ⅱ章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

第1項 平成29年度試掘調査の概要

平成29年度に市内遺跡発掘調査で実施した調査は、史跡の範囲確認、及び市内における各種開発計画に対する保存協議の資料を得るために行った。

保存目的の調査は、浦尻貝塚の範囲確認のための試掘調査、真野古墳群A地区及び永田古墳群Bの地形測量調査の3件である。浦尻貝塚の範囲確認調査は、本遺跡東部の東向き斜面の中腹から東麓に至る3,800㎡の範囲において実施し、真野古墳群A地区、永田古墳群Bの地形測量調査は、前者が700,000㎡、後者が110,000㎡を対象とした墳形及び周辺地形の把握を目的とした調査である。地形測量調査のうち、永田古墳群B地区の調査については、平成28年度に土砂採取事業に伴う試掘調査の報告の際、本測量調査の成果を合わせて掲載済みである。

緊急的な開発を起因とする調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地内において15遺跡18地点、周知の埋蔵文化財包蔵地外において2地点実施しており、合計20地点にて行った。また、現在整理作業中のため本書には掲載しないが、平成29～30年度に梨木下西館跡では、本発掘調査を実施している。緊急的な開発を起因とする試掘調査を開発目的別に見ると、個人住宅建設関連が7件、集合住宅建設関連が2件、個人農地造成関連が1件、土砂採取計画関連が6件、太陽光発電施設建設関連が2件、その他の民間開発関連が1件、公共事業関連が1件、を数える。

個人住宅建設関連は、東町遺跡、八幡林遺跡(2地点)、上根沢原畑遺跡(2地点)、小高城跡、泉官衙遺跡、片草貝塚である。集合住宅建設関連は、東町遺跡、高見町B遺跡である。個人農地造成関連は、梨木下西館跡である。土砂採取計画関連は、比丘尼沢B遺跡、北明内遺跡、東迫遺跡、池ノ沢遺跡、小高区神山長畑地区、原町区深野入竜田地区である。公共事業関連は、鷺内遺跡である。その他の民間開発関連は、四ツ栗遺跡、大富西畑遺跡、上根沢原畑遺跡である。以上の調査については、事前に開発予定地における試掘調査の依頼を受けて調査を実施した。

第1項 平成29年度試掘調査の概要

No.	遺跡名	所在地	調査目的	立地	調査期間	対象面積 (開発面積) (㎡)	調査面積 (㎡)	取扱い	備考
1	真野古墳群 A地区	鹿島区寺内字八幡林 ・大谷地・仏方	保存 (地形測量調査)	下位 段丘	H29. 8. 28 ~H30. 3. 23	700,000.00	—	—	国指定史跡
2	永田古墳群B	鹿島区永田字永田	保存 (地形測量調査)	丘陵	H29. 9. 15 ~H30. 3. 15	110,000.00	—	—	平成28年度に試掘調査と併せて報告済
3	東町遺跡 4次調査	原町区東町	開発 (集合住宅建設)	中位 段丘	H29. 4. 5 ~4.6	561.00	54.30	立会	
4	八幡林遺跡 16次調査	鹿島区寺内字八幡林	開発 (個人住宅建設)	下位 段丘	H29. 4. 11	523.86	16.50	立会	
5	上根沢原畑遺跡 1次調査	小高区上根沢字原下	開発 (個人住宅建設)	下位 段丘	H29. 4. 10	556.74	4.30	立会	
6	鷺内遺跡 5次調査	鹿島区寺内字鷺内	開発 (公共事業)	谷底 平地	H29. 4. 25 ~5.23	16,786.00	120.00	本発掘 調査要	開発計画変更 →一部保存対応
7	梨木下西館跡 4次調査	原町区栗字塔場下	開発(個人農地造成)	中位 段丘	H29. 5. 19 ~5.29	413.00	39.70	本発掘 調査要	
8	四ツ栗遺跡 2次調査	小高区川房字四ツ栗	開発 (太陽光発電施設建設)	中位 段丘	H29. 6. 13 ~6.14	241,639.18	12.00	立会	
9	比丘尼沢B遺跡 1次調査	原町区上北高平 字比丘尼沢	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H29. 6. 6 ~7.26	21,336.00	107.40	本発掘 調査要	開発計画変更 →保存対応
10	小高区神山 長畑地区	小高区神山字長畑	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H29. 7. 26 ~8.10	8,576.00	14.90	本発掘 調査要	開発計画変更 →保存対応
11	北明内遺跡 2次調査	原町区石神字北明内	開発 (土砂採取事業)	中位 段丘	H29. 8. 7 ~8.10	8,690.00	163.80	慎重工事	
12	上根沢原畑遺跡 2次調査	小高区上根沢字堂北	開発 (個人住宅建設)	下位 段丘	H29. 8. 28	288.88	18.00	立会	
13	大富西畑遺跡 1次調査	小高区大富字東畑	開発 (民間介護施設)	下位 段丘	H29. 8. 29 ~8.30	1,127.24	50.00	立会	
14	東泊遺跡 1次調査	小高区上根沢字東泊	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H29. 8. 24 ~10.25	98,363.00	215.50	本発掘 調査要	本発掘調査面積
15	小高城跡 5次調査	小高区小高字城下	開発 (個人住宅建設)	谷底 平地	H29. 9. 21	290.00	3.80	立会	
16	浦原貝塚 14次調査	小高区浦原字台ノ前	保存 (範囲確認調査)	中位 段丘	H29. 9. 20 ~11.10	3,800.00	320.00	—	
17	原町区深野 入竜田地区	原町区深野字入竜田	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H29. 11. 14	14,750.00	3.50	慎重工事	
18	池ノ沢遺跡 1次調査	小高区神山字池ノ沢	開発 (土砂採取事業)	丘陵	H29. 11. 20 ~H30. 2. 1	20,000.00	135.30	本発掘 調査要	開発計画変更 →保存対応
19	泉官街遺跡 25次調査	原町区泉字宮前	開発 (個人住宅建設)	谷底 平地	H29. 12. 27	128.67	13.20	立会	
20	片草貝塚 1次調査	小高区片草字金場台	開発 (個人住宅建設)	中位 段丘	H30. 1. 9 ~1.31	1,424.35	9.30	立会	
21	高見町B遺跡 5次調査	原町区高見町一丁目	開発 (集合住宅建設)	下位 段丘	H30. 1. 30	991.00	30.00	慎重工事	
22	上根沢原畑遺跡 3次調査	小高区上根沢字原畑	開発 (太陽光発電施設建設)	中位 段丘	H30. 3. 7 ~3.12	2,061.85	180.00	慎重工事	
23	八幡林遺跡 17次調査	鹿島区寺内字八幡林	開発 (個人住宅建設)	下位 段丘	H30. 3. 14	385.21	23.00	立会	

目的		件数	調査対象面積 (開発面積)(㎡)	調査面積 (㎡)	備考
保存	地形測量調査	2	810,000.00	—	真野古墳群A地区及び永田古墳群B
	範囲確認調査	1	3,800.00	320.00	
小計		1	3,800.00	320.00	
開発	個人住宅建設	7	3,597.71	88.10	
	集合住宅建設	2	1,552.00	84.30	
	個人農地造成	1	413.00	39.70	本発掘調査(梨木下西館跡:2,700㎡) H29-H30に実施
	土砂採取事業	6	171,715.00	640.40	本発掘調査(東泊遺跡:4,000㎡) H31に実施
	太陽光発電 施設建設	2	243,701.03	192.00	
	民間事業	1	1,127.24	50.00	
	公共事業	1	16,786.00	120.00	本調査面積(鷺内遺跡:5,000㎡) H29-H30に実施
小計		20	438,891.98	1,214.50	
合計		21	442,691.98	1,534.50	

※地形測量調査は件数、調査対象面積の小計及び合計から除く。

表2 南相馬市埋蔵文化財調査状況一覧

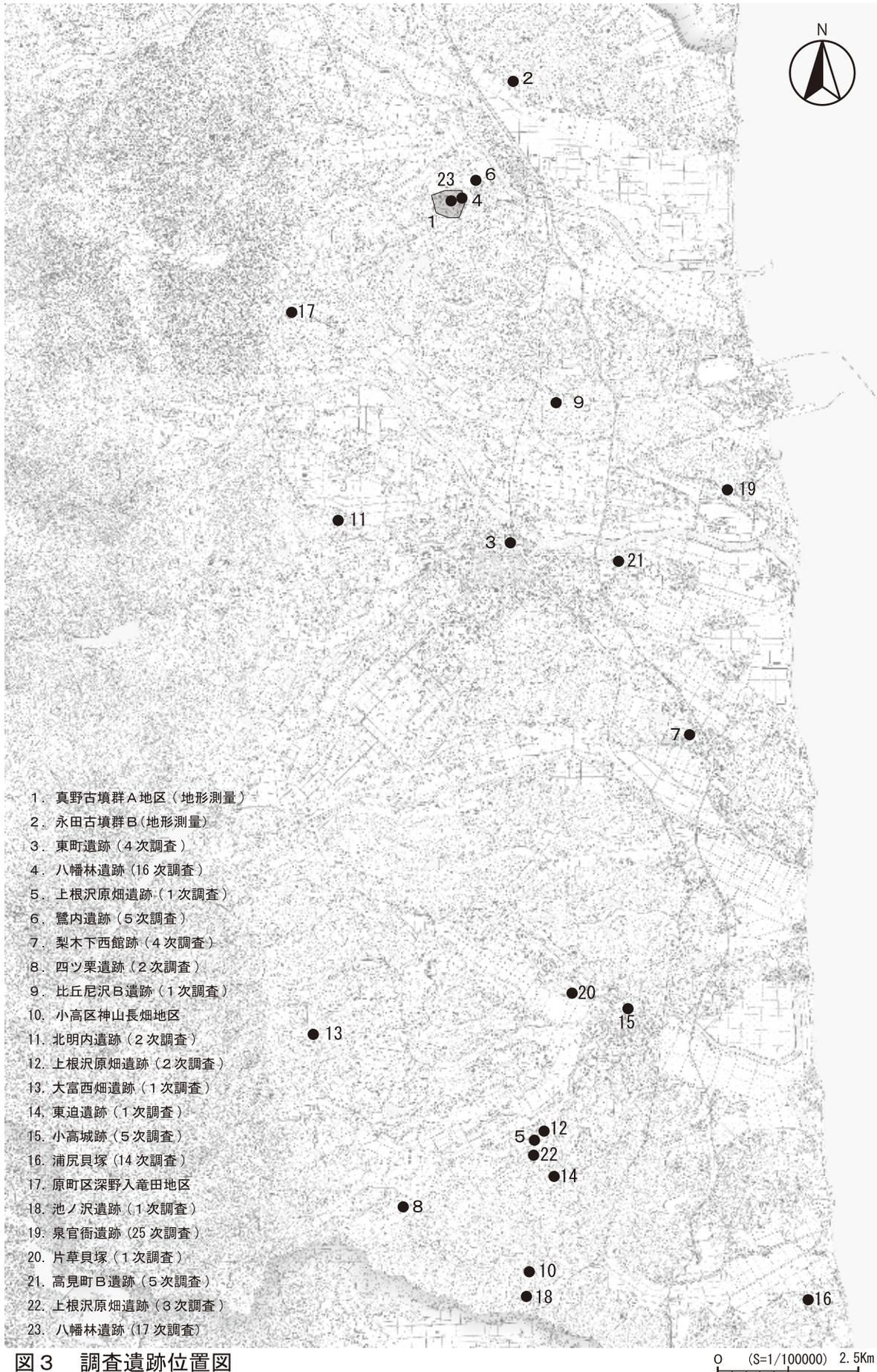


図3 調査遺跡位置図

0 (S=1/100000) 2.5Km

第Ⅲ章 調 査 成 果

第 1 節 平成29年度試掘調査成果

第 1 項 真野古墳群 A 地区

1. 調 査 内 容 範囲確認調査
2. 調 査 地 点 南相馬市鹿島区寺内字八幡林・大谷地
3. 調 査 期 間 平成29年8月8日～10月31日
4. 調査対象面積 約700,000㎡
5. 調 査 担 当 主任文化財主事 佐川 久
6. 調 査 概 要

【真野古墳群 A 地区について】

真野古墳群は、南相馬市鹿島区に位置する。この古墳群は、阿武隈高地から太平洋に向かって東流する上真野川南岸の河岸段丘面（東西約2km×南北約800m）に展開する。古墳群は、古墳の分布域より2つの範囲に括られており、今回の地形測量調査の対象となった古墳群は、真野古墳群の東側に分布する真野古墳群 A 地区である。A 地区には、現在、古墳が損壊古墳も含め35基現存する。そのうち26基は国史跡として指定を受けている。

【調査目的】

今回の地形測量調査は、現存する史跡26基の位置と周辺地形の状況を確認し、今後の保存、活用の方針を検討するために必要な基礎的な資料を収集するものである。

【調査方法】

今回の調査では、A地区を囲む約700,000㎡（南北700m×東西1,000m）の範囲について、航空測量を行い1/500地形図を作成した。また、既存の古墳の形状が確認できるように古墳は25cm、周辺地形は1.0mの間隔で等高線を引いた。

7. 調 査 成 果

今回の測量調査の結果から、A地区における古墳の分布状況が明確となった。古墳が段丘上の南北崖縁付近に展開し、2つの支群が構成されている。

また、古墳群が置かれている現状も如実に表現しており、住宅などの民間所有地に取り囲まれるように存在している状態が見られ、史跡を継続的に保護及び活用していくことが困難な状況にある。また、古墳に伴う周溝の想定範囲内に、建物や公道が存在している箇所も見受けられることから、史跡の保護を優先的に検討する必要もある。

このような基礎的な調査を行うことで、古墳群をとりまく環境を改善していくことが求められる。今後は、古墳群の保護と活用について喫緊に検討を進めていくものとする。

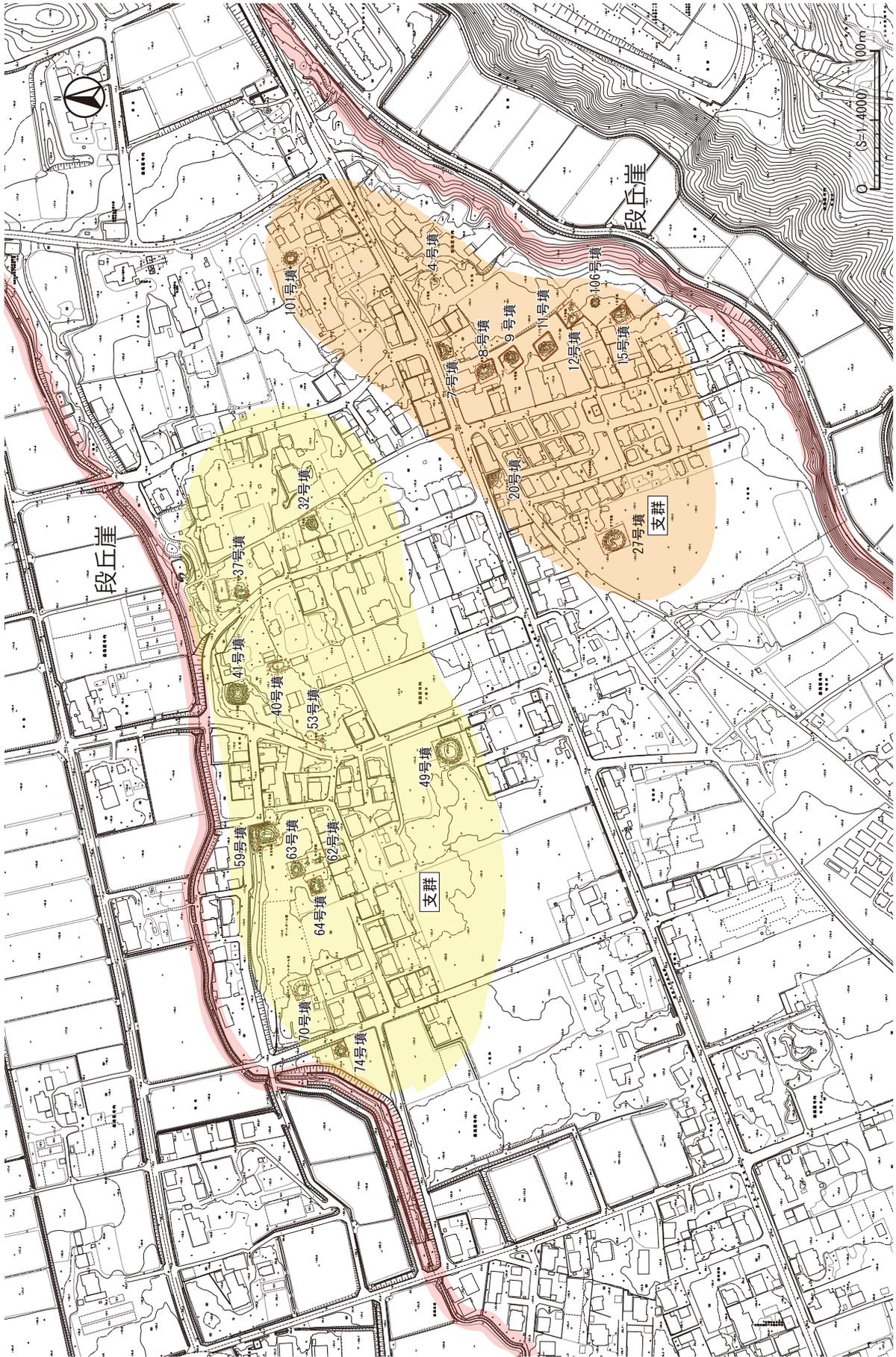


图4 真野古墳群A地区現況地形图

第2項 東町遺跡（4次調査）

1. 調査原因 集合住宅建設
2. 調査地点 原町区東町
3. 調査期間 平成29年4月5日～6日
4. 調査対象面積 561m²
5. 調査面積 54.3m²
6. 調査担当主 査 林 紘太郎
埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
7. 調査成果 開発予定地に調査区を2箇所設定した。

調査により、現地表面から深さ約70～80cmのところまで基盤層である褐色土を確認した。この層の上面において遺構を確認したところ、1Tではピット16基、2Tではカマドを伴う竪穴住居跡1軒、ピット40基を確認した。遺構に伴う遺物は出土しておらず、竪穴住居跡はカマドを伴うことより古墳時代中期以降と考えられる、小穴の年代は不明である。

8. 調査所見 今回の試掘調査で確認した遺構は、掘削工事が及ばないことから、改めて保存協議の必要はないが、埋蔵文化財包蔵地内の開発であるため、立会による対応とする。

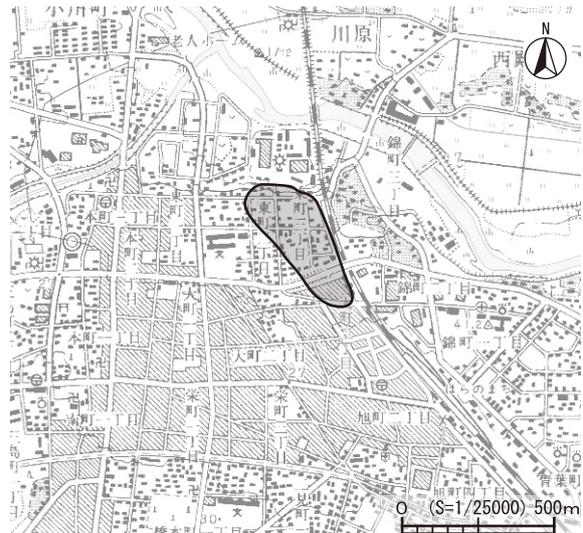


図5 東町遺跡位置図

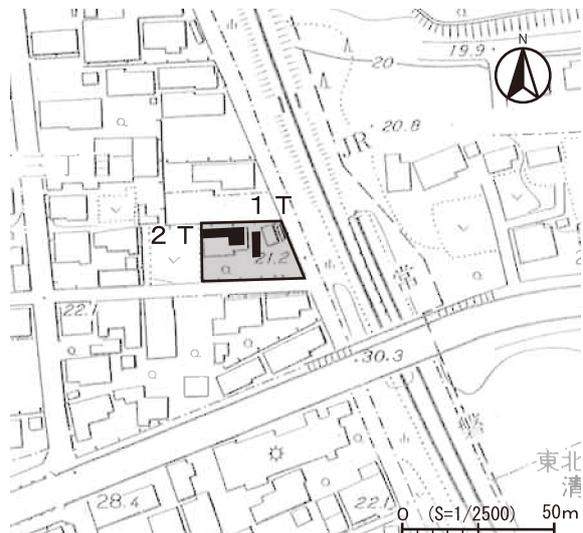


図6 調査区位置図

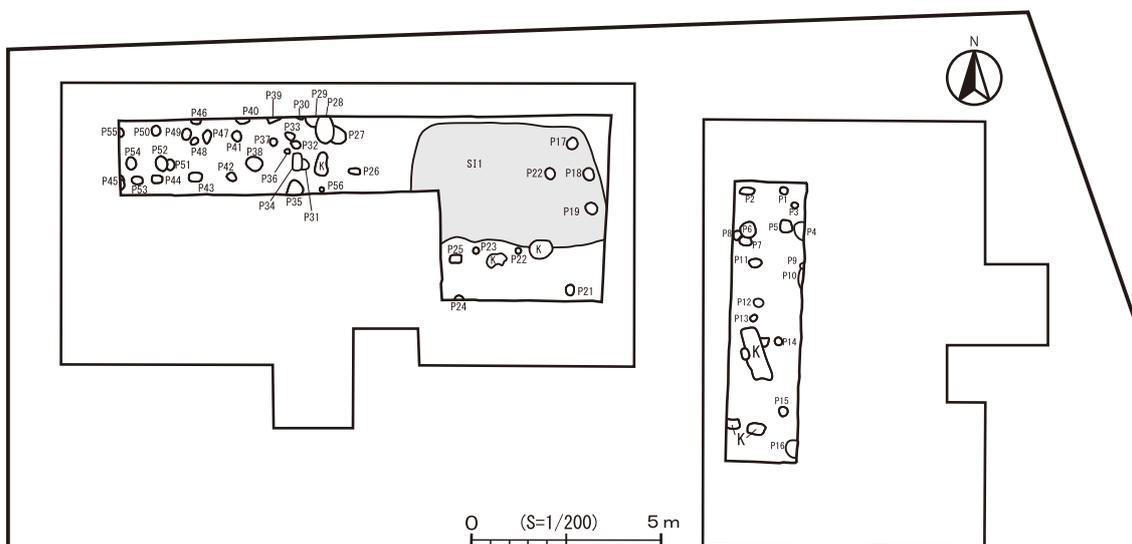


図7 遺構配置図

第2項 東町遺跡（4次調査）



写真1 1T調査状況



写真2 1T土層断面



写真3 作業状況



写真4 2T調査状況



写真5 2T S11検出状況



写真6 2T土層断面

第3項 八幡林遺跡 (16次調査)

- 1. 調査原因 個人住宅建設
- 2. 調査地点 鹿島区寺内字八幡林
- 3. 調査期間 平成29年4月11日
- 4. 調査対象面積 532.86㎡
- 5. 調査面積 16.5㎡
- 6. 調査担当 主査 林 紘太郎
埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江

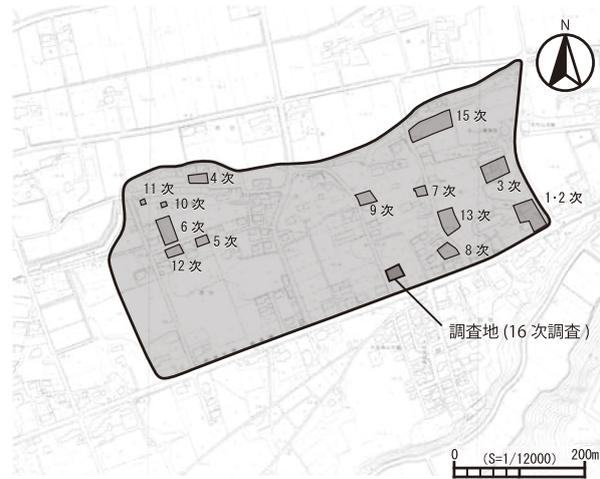


図8 八幡林遺跡位置図

- 7. 調査成果 開発予定地に調査区を2箇所設定した。

調査により、現地表面から深さ約40～50cmで基盤層である褐色土を確認した。この層上面を精査し、遺構の確認を行ったが、遺構、遺物は確認できなかった。

- 8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。このことから改めて発掘調査等による保存協議を行う必要はない。ただし、埋蔵文化財包蔵地内における開発であることから立会による対応とする。

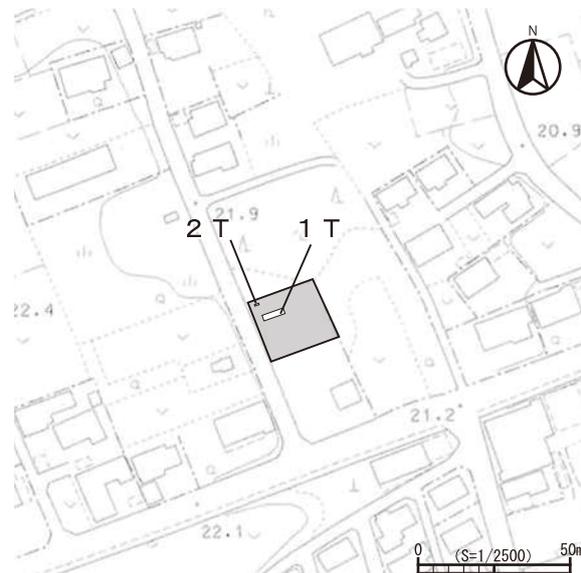


図9 調査区位置図



写真7 1 T調査状況



写真8 2 T調査状況

第4項 上根沢原畑遺跡（1次調査）

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 小高区上根沢字原下
3. 調査期間 平成29年4月10日
4. 調査対象面積 556.74m²
5. 調査面積 4.3m²
6. 調査担当主 査 林 紘太郎
7. 調査成果 開発予定地に調査区1箇所を設定し、埋蔵文化財の確認を行った。

調査では、現地表面から深さ約30cmで基盤層である褐色土を確認した。この層の上面において遺構の確認を行ったところ、ピットを14基確認した。地表面から基盤層までの堆積土から土師器片を確認した。しかし、細片のため、器種や年代については不明である。確認したピットに伴う遺物は出土しておらず、性格及び年代は不明である。

8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲内において、ピットや土師器片を確認したが、開発による掘削により、遺構に損壊しないことから、改めて保存協議を行う必要はない。ただし、埋蔵文化財包蔵地内における開発であることから立会による対応とする。

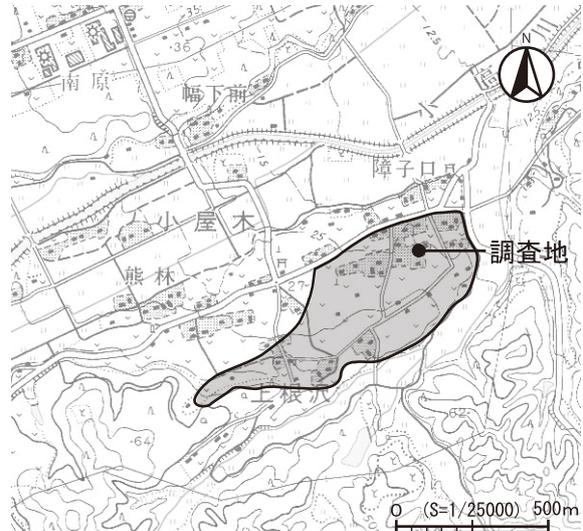


図10 上根沢原畑遺跡位置図

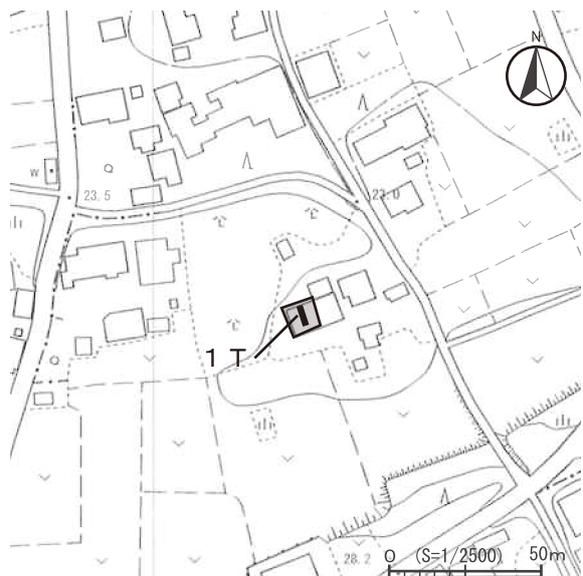


図11 調査区位置図



写真9 調査前状況



写真10 1 T調査状況

第5項 鷺内遺跡（5次調査）

1. 調査原因 特別支援学校建設
2. 調査地点 鹿島区寺内字鷺内
3. 調査期間 平成29年4月25日
～5月23日
4. 調査対象面積 4,743㎡
5. 調査面積 約120㎡
6. 調査担当主査 佐川 久
文化財主事 高橋 保雄
(新潟県派遣)

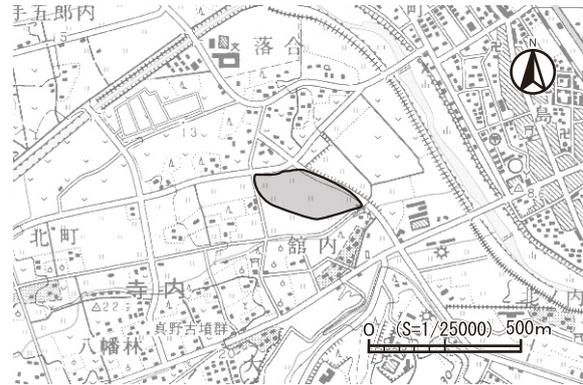


図12 鷺内遺跡位置図



写真11 2 T S I 1 検出状況

7. 調査成果 試掘調査では、前年度に行った3・4次調査において、調査区を設定することが困難であった地点に6箇所の調査区を設け、埋蔵文化財の確認を行った。

調査の結果、西側に設定した3～6 T においては、保存協議を必要とする遺構や遺物を確認できなかった。東側に設定した1 Tでは、現地表面から深さ35cmで縄文時代の土坑を1基確認した。2 Tからは、縄文時代の住居跡1軒（S I 1）と土坑1基を確認した。

8. 調査所見 調査の結果、1・2 Tからは、保存協議を必要とする埋蔵文化財を確認した。そのため、遺構検出面まで掘削が及ぶ工事を施工する場合は、改めて保存協議を要する。3～6 Tでは、明らかな埋蔵文化財は確認できなかったことから、改めて保存協議を行う必要はない。

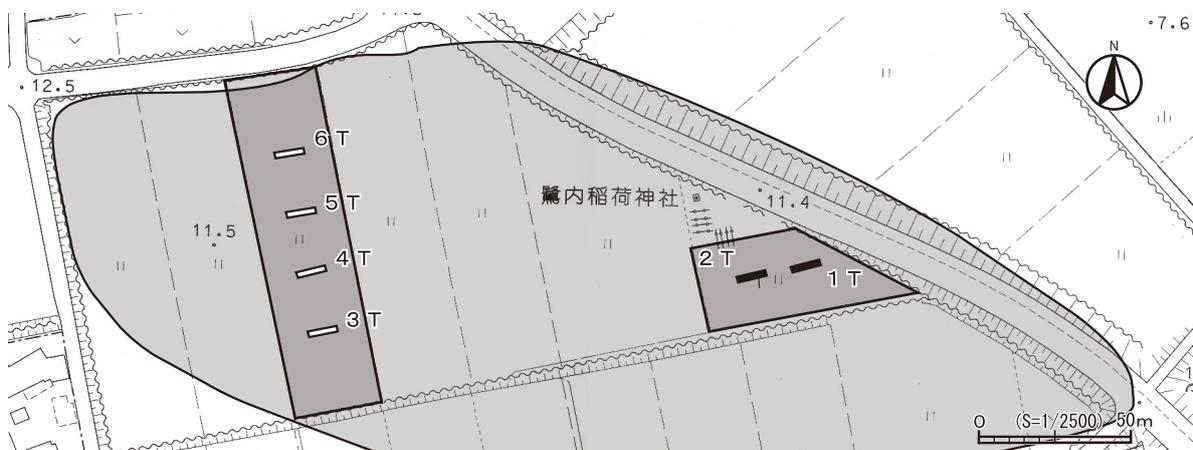


図13 調査区位置図

第6項 梨木下西館跡（4次調査）

1. 調査原因 個人農地造成
2. 調査地点 南相馬市鹿島区雫字塔場下
3. 調査期間 平成29年5月19日
～5月29日
4. 調査対象面積 413m²
5. 調査面積 39.7m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
文化財主事 高橋 保雄（新潟県派遣）



図14 梨木下西館跡位置図

7. 調査成果 試掘調査では、前年度の3・4次調査において調査区を設定できなかった地点に調査区を2箇所設定し、埋蔵文化財の確認を行った。

調査の結果、1 T及び2 Tともに、現地表面から30～50cmの深さで褐色土の基盤層を検出した。この層の上面において遺構を確認したところ、1 Tでは古代の竪穴住居跡3軒、柱穴1基、溝を1条、性格不明のピット5基確認した。

S I 1は調査区の中央付近で確認した。S I 1は西辺の一部と南西角を確認したが、南辺と南東角は確認できなかった。S I 2・3、SD 1は、調査区西端で確認し、S I 2が最も古く、次にS I 3、SD 1の順で重複していた。柱穴は1基のみ確認した。



図15 調査区位置図

2 Tでは、古代の竪穴住居跡1軒と性格不明のピット4基確認した。S I 4は、3 m四方の隅丸形状を呈している。ピットはS I 4の覆土を掘り込む形で重複している。

竪穴住居跡や柱穴は2次、3次調査でも同様に確認されていた。今回、調査を行った開発範囲においても古代の集落跡の広がっているものと考えられる。

8. 調査所見 今回の調査により、開発範囲内において、保存協議を要する埋蔵文化財が確認された。そのため、検出面まで掘削が及ぶ工事を施工する場合は、改めて保存協議を要する。工事施工による埋蔵文化財への影響が免れない場合は、記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



写真12 調査前状況



写真13 1 T 調査状況



写真14 1 T S I 1 検出状況



写真15 1 T S I 2・3 検出状況



写真16 1 T ピット検出状況



写真17 2 T 調査状況



写真18 2 T S I 4 検出状況



写真19 2 T ピット検出状況

第7項 四ツ栗遺跡（2次調査）

- 1. 調査原因 太陽光発電施設建設
- 2. 調査地点 小高区川房字四ツ栗
- 3. 調査期間 平成29年6月13日～14日
- 4. 調査対象面積 241,639.2m²
- 5. 調査面積 12m²
- 6. 調査担当 主査 林 紘太郎
埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江



図16 四ツ栗遺跡位置図

- 7. 調査成果 開発予定地に調査区を5箇所設定した。

各調査区の現地表面から基盤層(褐色土)までの深さは、1 Tで20cm、2 Tで50cm、3 Tで80～90cm、4 Tで30～40cm、5 Tで50cmを測った。基盤層上面において遺構の確認を行ったが、埋蔵文化財は確認されなかった。

- 8. 調査所見 調査の結果、開発範囲内において、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかった。このことから改めて保存協議を行う必要はない。ただし、埋蔵文化財包蔵地内における開発であることから立会による対応とする。



図17 調査区位置図



写真20 1 T調査状況



写真21 2 T調査状況

第8項 比丘尼沢B遺跡（1次調査）

1. 調査原因 土砂採取
2. 調査地点 原町区上北高平字比丘尼沢
3. 調査期間 平成29年6月6日
～7月26日
4. 調査対象面積 56,610m²
5. 調査面積 107.4m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
文化財主事 高橋 保雄
(新潟県派遣)

7. 調査成果 試掘調査では、表面調査により確認した廃滓場及び木炭窯跡の周辺において、製鉄に関連した遺構の分布状況を確認するため、開発予定地内に調査区を17箇所設定し、埋蔵文化財の確認を行った。

調査区は、開発区域の南北に延びる東向き斜面に設定した。

調査の結果、北部の谷頭周辺において、木炭窯跡が連なる形で確認された。木炭窯は、1、2、4～6、13T（2T、13Tは同一遺構と考えられる）において確認し、少なくとも6基存在している。

14～17Tでは、木炭焼成坑を1基確認した。また、16・17Tから鉄滓と羽口が少量出土したが、廃滓場のような広がり確認されず、西側の谷の廃滓が一部流れ込んだものと考えられる。

8. 調査所見 調査の結果、開発範囲内に古代の製鉄関連遺構が確認された。そのため、掘削を伴う開発を行う場合は、事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には記録保存のための本発掘調査が必要となる。

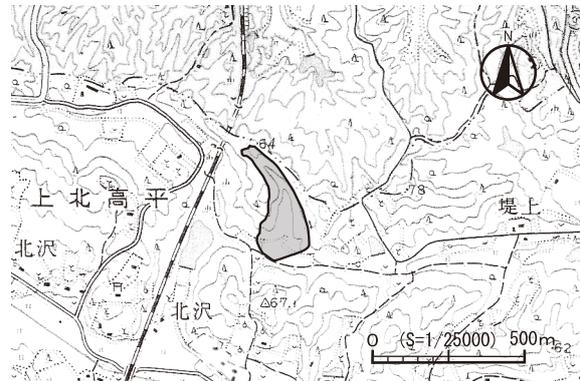


図18 比丘尼沢B遺跡位置図

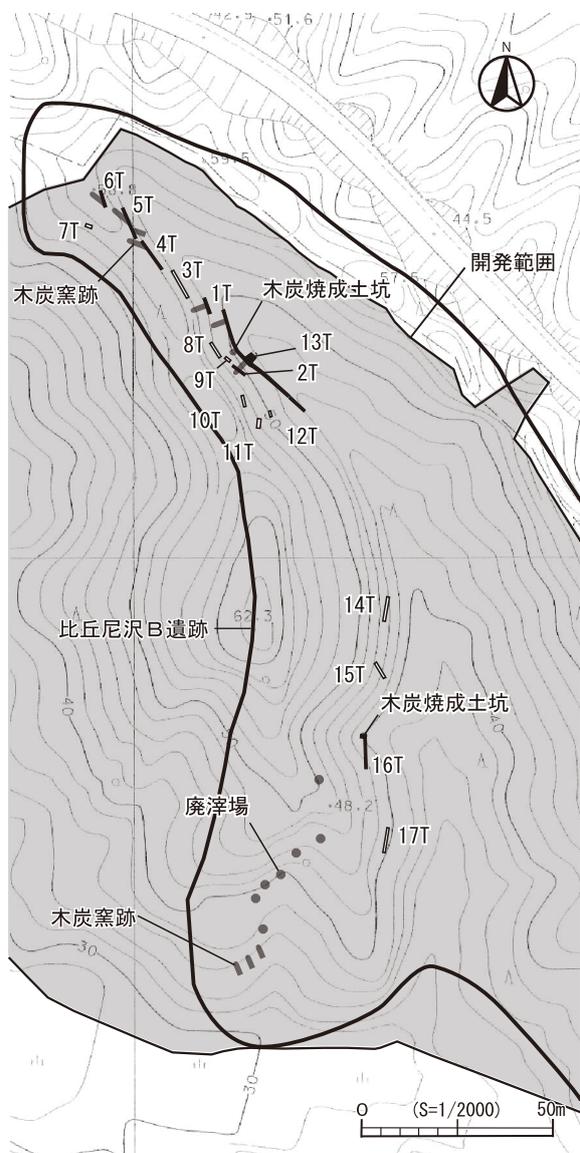


図19 調査区位置図



写真22 調査区遠景



写真23 調査前状況



写真24 1 T木炭窯跡検出状況



写真25 4 T木炭窯跡検出状況



写真26 5 T木炭窯跡検出状況



写真27 6 T木炭窯跡検出状況



写真28 13 T木炭窯跡土層断面



写真29 13 T木炭焼成坑検出状況

第9項 小高区神山長畑地区

1. 調査原因 土砂採取
2. 調査地点 南相馬市小高区神山字池ノ沢
3. 調査期間 平成29年7月26日
～8月10日
4. 調査対象面積 8,576m²
5. 調査面積 14.9m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
文化財主事 高橋 保雄
(新潟県派遣)
7. 調査成果 調査では、開発範囲内に幅1mの調査区を7箇所設定し、埋蔵文化財の確認を行った。

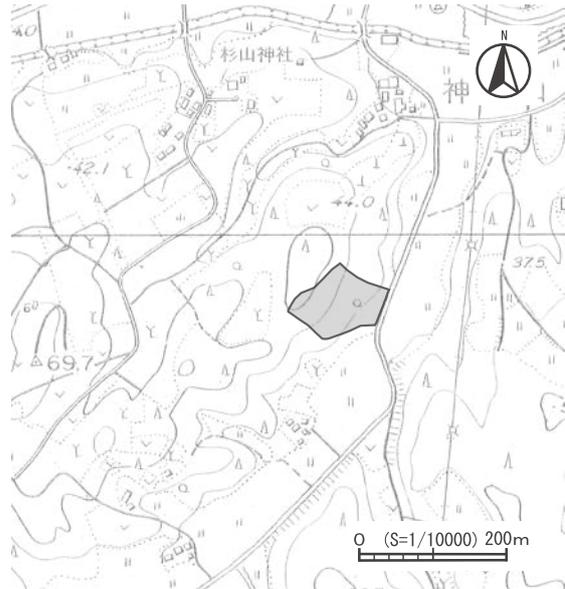


図20 神山長畑地区位置図

調査の結果、谷頭に設定した5 Tから製鉄に関連した作業場と推定される遺構を確認した。遺構内から鉄滓及び土師器片が出土した。また、5 Tの斜面下方において、廃滓場を1箇所確認した。

8. 調査所見 調査の結果、5 Tより製鉄関連の遺構を確認したことから、5 T周辺において、掘削を伴う工事を施工する場合は保存協議を要する。また、協議により埋蔵文化財に影響が及ぶと判断された場合は記録保存のための本発掘調査を要する。

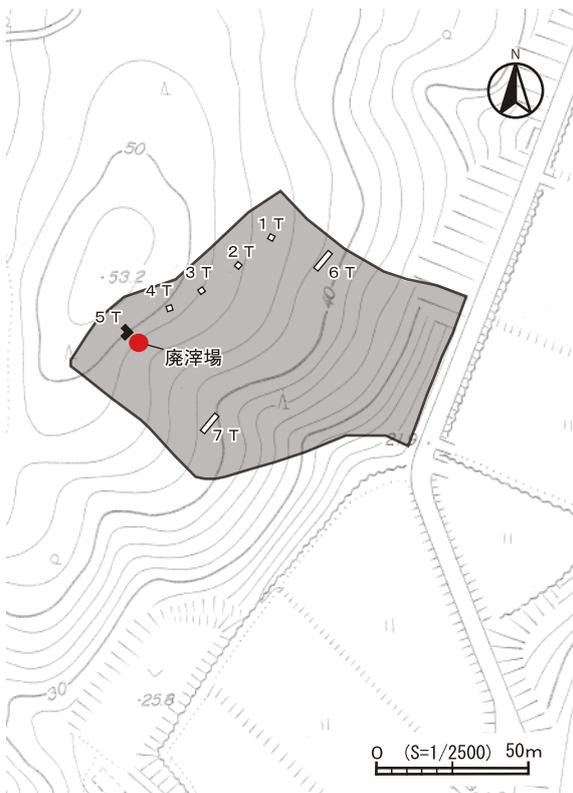


図21 調査区位置図



写真30 1 T調査状況



写真31 5 T調査状況

第10項 北明内遺跡（2次調査）

1. 調査原因 土砂採取事業
2. 調査地点 原町区石神字北明内
3. 調査期間 平成29年8月7日～10日
4. 調査対象面積 8,690m²
5. 調査面積 163.8m²
6. 調査担当 主 査 林 紘太郎
埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
7. 調査成果 開発予定地に調査区を7箇所設定し、埋蔵文化財の確認を行った。

調査により、現地表面から深さ60～80cmのところまで褐色粘質シルトからなる基盤層を確認した。この層の上面を精査したところ、遺構は確認できなかった。また、基盤層までの堆積土から、遺物を確認することはできなかった。

8. 調査所見 試掘の結果、改めて保存協議を要する埋蔵文化財は確認できなかった。しかし、埋蔵文化財包蔵地内における開発であることから、文化財への影響を考慮し、慎重工事による対応とする。



図22 北明内遺跡位置図

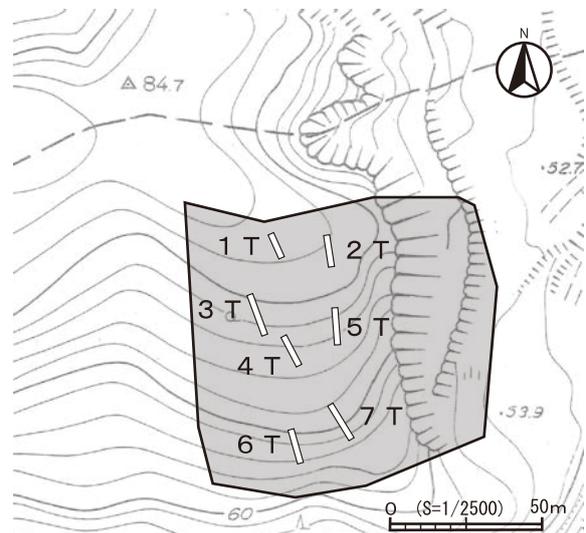


図23 調査区位置図



写真32 調査状況



写真33 3 T調査状況

第11項 上根沢原畑遺跡（2次調査）

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 小高区上根沢字堂北
3. 調査期間 平成29年8月28日
4. 調査対象面積 288.88㎡
5. 調査面積 18㎡
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
文化財主事 高橋 保雄
(新潟県派遣)

7. 調査成果 開発予定地に調査区を2箇所設定した。調査により、現地表面から深さ約10～30cmのところまで基盤層である褐色土を確認した。

この層上面を精査し、遺構の確認を行ったところ、1 Tではピット6基を確認したが、遺物は確認されなかった。2 Tでは遺構、遺物とも確認されなかった。

8. 調査所見 今回の試掘調査により、開発範囲内において遺構は存在するものの、掘削工事により損失しないことから、改めて発掘調査等による保存協議を行う必要はない。ただし、遺跡包蔵地内における開発であることから立会による対応とする。



図24 上根沢原畑遺跡位置図

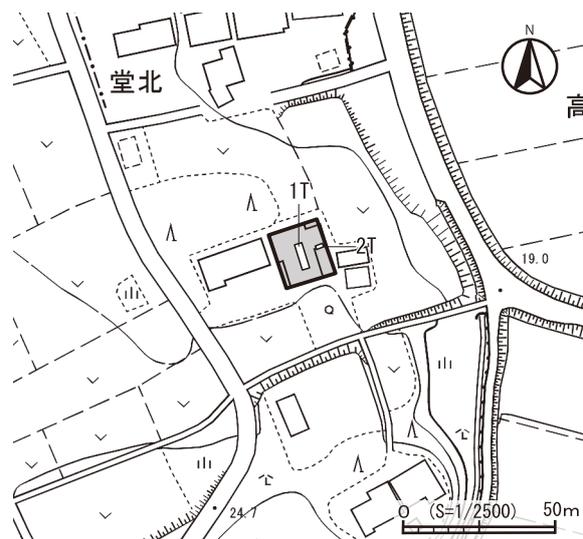


図25 調査区位置図



写真34 1 T調査状況



写真35 2 T調査状況

第12項 大富西畑遺跡（1次調査）

1. 調査原因 民間介護施設建設
2. 調査地点 小高区大富字東畑
3. 調査期間 平成30年8月29日～30日
4. 調査対象面積 1127.24m²
5. 調査面積 50m²
6. 調査担当 主査 林 紘太郎
文化財主事 高橋 保雄
(新潟県派遣)

7. 調査成果 開発予定地に調査区を3箇所設定し、埋蔵文化財の確認を行った。現地表面から深さ90～110cmのところ、基盤層である礫を含んだ黄褐色砂質シルト層を確認した。この層の上面を精査したところ、遺構は確認できなかったが、地表面から基盤層までの堆積層から数点の縄文土器の碎片を確認した。
8. 調査所見 今回の調査では、数点の縄文土器片を確認したのみであり、遺構は確認されなかった。出土量が少ないことから遺物包含層は形成されていないと考える。

このことから開発予定地には、改めた保存協議の必要はない。ただし、周知の埋蔵文化財包蔵地であることから慎重工事による対応とする。



図26 大富西畑遺跡位置図



図27 調査区位置図



写真36 1 T調査状況



写真37 2 T調査状況

第13項 東迫遺跡（1次調査）

1. 調査原因 土砂採取
2. 調査地点 南相馬市小高区上根沢字東迫
3. 調査期間 平成29年8月24日
～ 10月25日
4. 調査対象面積 98,363m²
5. 調査面積 215.5m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
文化財主事 高橋 保雄(新潟県派遣)
文化財主査 加藤 学(新潟県派遣)

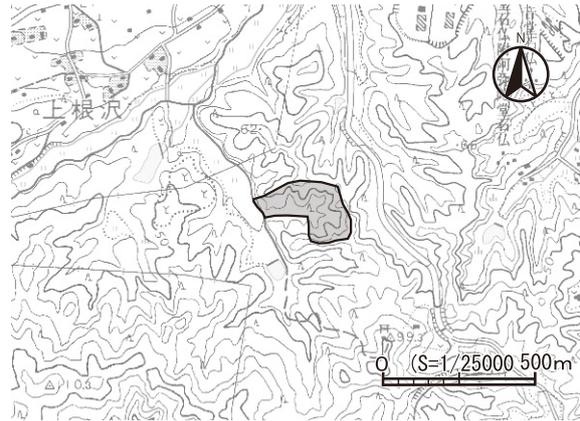


図28 東迫遺跡位置図

7. 調査成果 今回の試掘調査では、表面調査の段階で確認された廃滓場を中心に、開発範囲内に調査区を52箇所設定、廃滓場の範囲確認及び製鉄に関連した遺構の確認を行った。

調査の結果、開発範囲東端の谷に設定した1、24Tでは木炭焼成坑を1基、10Tでは木炭窯跡を1基、13Tでは製鉄炉跡を2基確認した。

1 Tでは、現地表面から約30cmの深さで炭化物を多量に含んだ黒色土を検出した。黒色土が斜面上方に伸びる可能性が考えられるため、24Tを設定し、黒色土の確認を試みたが検出しなかった。そのため、1 Tと24Tの間の表土を除去したところ、黒色土の広がりを確認した。形状は隅丸方形であり、規模は長軸4.2m、短軸1.8mを測る。この黒色土内から、焼土や被熱した土塊などは確認していないことから、木炭窯跡である可能性は低い。後述

するが、この調査区の北西には、製鉄炉跡を2基確認している。これらの製鉄炉の操業に関連した遺構の可能性が伺えよう。

10Tでは、現地表面から深さ約60cmの位置で炭化物を多量に含んだ黒色土を確認した。この黒色土の広がりを確認するため、調査区を斜面上方に拡張した。その結果、被熱により硬化した壁面が、斜面上方に伸びる状況を確認した。このことにより、木炭窯跡である可能性が高い。

13Tは、谷の頂部付近の平坦部に設置した調査区である。現地表面から深さ約30cmの位置で製鉄炉跡を2基確認した。2基の製鉄炉跡のうち、調査区北側において確認した1号製鉄炉跡は、斜面上方から下方に向かって伸びる被熱面を確認した。その際、鉄滓と羽口



図29 調査区位置図

も併せて出土しており、羽口は被熱面の両辺に沿う形で出土していた。おそらく、この製鉄炉の送風に使用したものと考えられ、この状況から箱形炉であることが濃厚であろう。南側で確認された2号製鉄炉跡は、明確な被熱面を確認することはできなかった。しかし、周囲からは鉄滓と1号製鉄炉と同形状の羽口片が出土しており、1号製鉄炉跡と同じ炉形の製鉄炉が築かれていた可能性が高い。これら製鉄炉の南西斜面下方には、廃滓場が形成されていた。おそらく上記の製鉄炉から排出された鉄滓により形成したと考えられる。

8. 調査所見 調査の結果、開発範囲内より木炭焼成坑、木炭窯跡、製鉄炉跡及び廃滓場を確認した。これらの遺構を確認した谷全域においては、他にも製鉄関連遺構が存在する可能性が高い。そのため、当地において開発行為を行う場合は事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には記録保存を目的とした本発掘調査が必要となる。



写真38 1 T 黒色土検出状況



写真39 10 T 調査状況



写真40 10 T 木炭窯跡検出状況



写真41 13 T 製鉄炉跡検出状況



写真42 13 T 1号製鉄炉跡検出状況



写真43 13 T 2号製鉄炉跡検出状況

第14項 小高城跡（5次調査）

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 小高区小高字城下地内
3. 調査期間 平成29年9月21日
4. 調査対象面積 205m²
5. 調査面積 3.75m²
6. 調査担当主 査 林 紘太郎
7. 調査成果 開発予定地に調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の確認を行った。

調査では、現地表面から深さ約1.4mのところまで基盤層である黄褐色細粒砂の層を確認した。この層は、南に流れる小高川に由来する堆積層であろう。この層の上面を精査したところ、ピットを4基確認した。しかし、覆土内から近年の建築資材が出土したことから、後世の攪乱と判断した。その他遺物は確認できなかった。

8. 調査所見 調査の結果、遺構・遺物は確認されず、改めた保存協議を行う必要はない。しかし、周知の埋蔵文化財包蔵地内であるとともに、県史跡小高城跡の指定範囲の隣接地である。このことから、掘削工事を施工する際は、立会による対応とする。

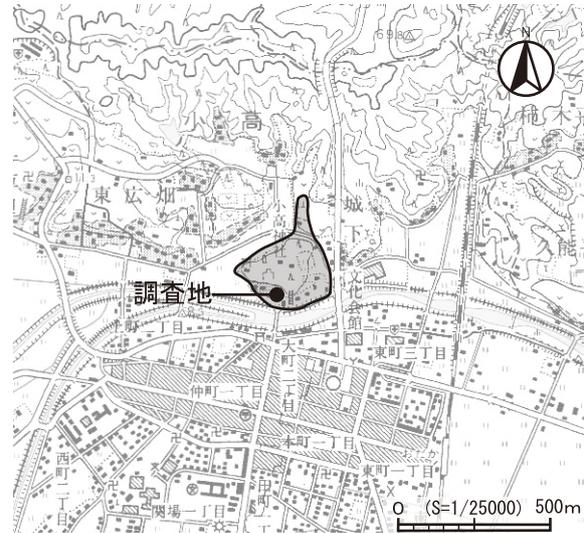


図30 小高城跡位置図

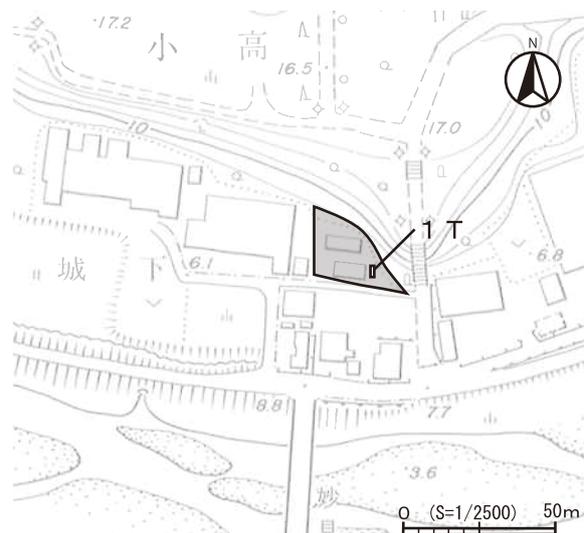


図31 調査区位置図



写真44 調査前状況



写真45 1 T調査前状況

第15項 浦尻貝塚 (14次調査)

1. 調査地点 小高区浦尻字南台ほか
2. 調査期間 平成29年9月26日～平成29年11月10日
3. 調査対象面積 3,800㎡
4. 調査面積 320㎡
5. 調査担当 埋蔵文化財調査員 小椋紗貴江
主 査 林 紘太郎
6. 遺跡の概要 浦尻貝塚は南相馬市小高区浦尻南台に位置し、縄文時代前期後葉から晩期中葉にかけての貝塚をともなう集落である。長期間の利用が認められ、周辺地域で唯一貝塚の継続的な形成が見られる中核的な集落である。
平成12年度に旧小高町道の建設計画によって、小高町教育委員会による試掘調査が実施された。この調査によって貝層をはじめ、遺構が良好な保存状況で確認され、建設計画が見直された。その後実施された保存目的の発掘調査によって当地域の縄文文化を解明する上で極めて重要であると評価され、この成果をもって、平成18年1月に国指定史跡に指定され、平成22年の追加指定とあわせ、現在の指定面積は71,510.74㎡である。



図32 浦尻貝塚位置図

7. 調査に至る経緯 平成23年3月11日に発生した東日本大震災によって、浦尻貝塚周辺地区は甚大な被害を受け、翌年度に工事着手を控えていた浦尻史跡整備事業は一時中止を余儀なくされた。また、浦尻貝塚の隣接した住宅が津波により消失した。被災した当該地については震災後の史跡の保存活用を含め、今後の土地利用を考えるうえで埋蔵文化財の状況を把握する必要があることから、保存目的の調査を行った。

8. 調査方法 調査は、本遺跡の北部にあたる段丘東向き斜面の中腹から東麓に至る3,800 m²の範囲を対象とし、遺構の分布状況を確認することを目的とした。

確認調査は10m×2mを基準としたトレンチを19箇所設定した。そのうち調査を行ったのは16箇所である。3T、5T、9Tは欠番とした。表土の除去及び埋戻しはバックホーを用い、それ以外の遺構検出及び精査作業は人力で行った。

確認した遺構については、保存のため遺構内掘り下げを原則として行わないこととした。遺構内及び遺構確認面から出土した遺物については、検出状況から原位置を保存するのに支障があるもののみ取り上げた。

出土遺物に関しては、調査区・遺構・層位・日付を記録のうえ取り上げた。記録写真は35mm版カラーリバーサルフィルム・モノクロネガフィルムで作成し、適宜デジタルカメラを使用した。

平面図は、公共座標に準じた基準杭を設定し、この基準杭を基準にして遺構実測支援ソフト(株式会社CUBIC)を使用して平面図を記録した。

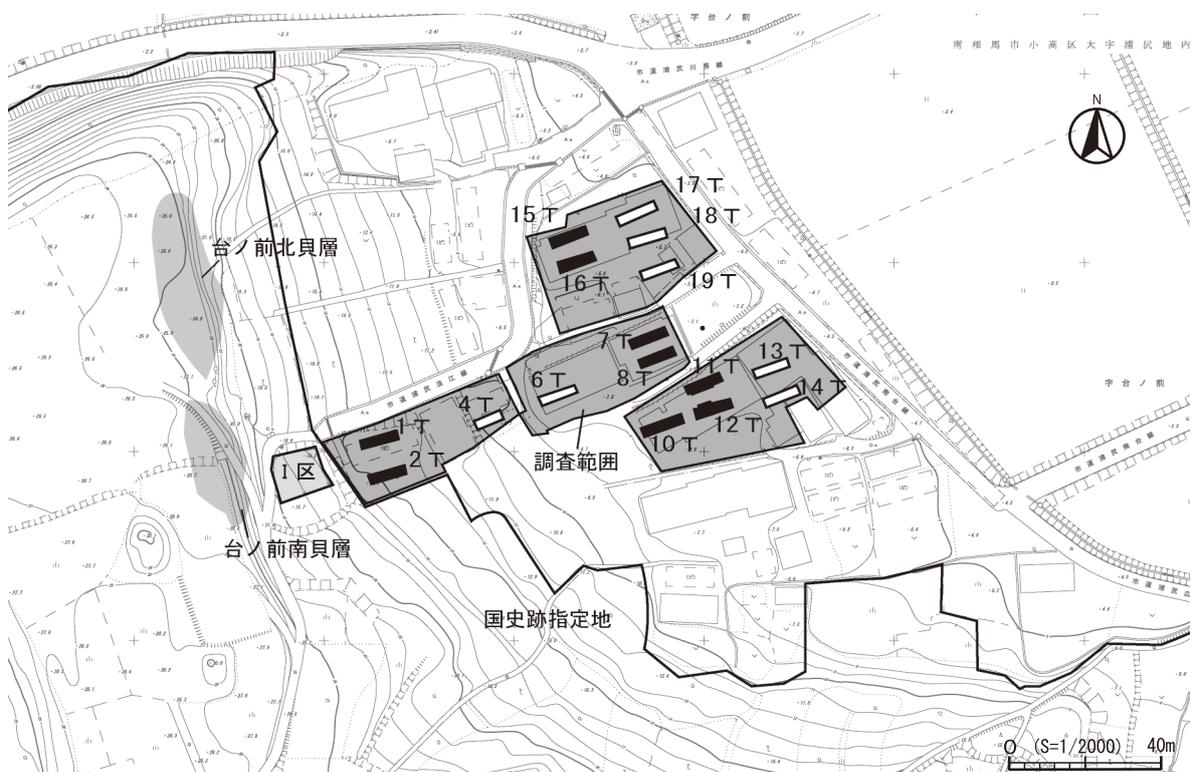


図33 調査区位置図

9. 調査成果

【1・2 T】これまでの調査から、縄文時代前期から後期の居住域が存在する段丘の北東側斜面には台ノ前北貝層と台ノ前南貝層が確認されている。台ノ前北貝層（標高約25.0m）下の斜面中腹にあたるI区（標高約18.0m）において、縄文時代中後期を中心とする遺物包含層が確認されている。1・2 Tの調査区はI区の斜面下側においてI区で検出した縄文時代の遺物包含層の分布状況を確認するために設定した。

1 Tと2 Tの標高は約14.6mを測る。1 Tの基本土層のうち、LⅢより上位層は含有物から近代以降の堆積と考えられる。調査区東側はLⅢ層直下に遺物が含まれず、縄文時代以前の堆積層と考えられる黄褐色を基調とする砂質シルト（LⅦ・Ⅷ層）が認められる。このことから、東側は近代以降に流出または崩落したものと考えられる。

LⅢ層下には黒色を呈し、縄文土器、土師器が混在するLⅤ層が堆積し、その下層にこぶし大の礫を含むLⅥ層を確認した。LⅥ層上面を遺構確認面とし、遺構検出を行った結果、溝1条のほか、ピットを28基確認した。

また、LⅥ層の堆積時期を確認するため、調査区南側にサブトレンチを設けて部分的な掘り下げを行った。LⅥ層においても縄文土器のほか、土師器が混在して出土し、一定量の礫も多く含まれることから、これらは斜面上位の段丘堆積層及び縄文時代から奈良・平安時代の遺物包含層が混在して流出し、再堆積したものと考えられる。このことからLⅥ層上面で確認された遺構は中世以降の所産であると判断される。

2 Tでは、表土（LⅠ層）及び暗褐色を基調としたLⅡ層の下位に、1 T最下層で確認したLⅦ・Ⅷ層と同一層にあたるLⅢ層を検出したため、遺構確認面とした。LⅢ層は東に向かってなだらかに下方傾斜している。

調査区東端では、土坑2基（2 T-SK 1・2）を検出した。2 T-SK 1・2の覆土は黒褐色土を基調とし、ともに長軸は120cm、深さは2 T-SK 1が20cm、2 T-SK 2は40cmを測る。2 T-SK 1・2では湧水が認められることから、水を利用するために掘削されたことが示唆される。2 Tの斜面上方のI区では、近世の木組み水場遺構が確認されており、関連性を指摘できよう。この他、LⅢ上面からピット17基を検出したが、形成時期を示す遺物は出土しなかった。

1・2 Tから、図40-2の大木8 a式など縄文中期から後期の土器が出土しているほか、少量の土師器が出土している。この他、奈良・平安時代以降と考えられる土錘が出土している。これらは混在する出土状況より斜面上位からの流れ込みと考えられる。

これらの調査結果より、1・2 Tでは、古代以前の明確な遺構が確認できなかったこと、及び、出土した遺物が奈良・平安時代を下限と示すことから、1・2 Tで確認した遺構は、中世以降の構築である可能性が高いと言える。当該地区には、I区で確認した縄文時代の遺物包含層及び遺構は、分布していないと判断できる。

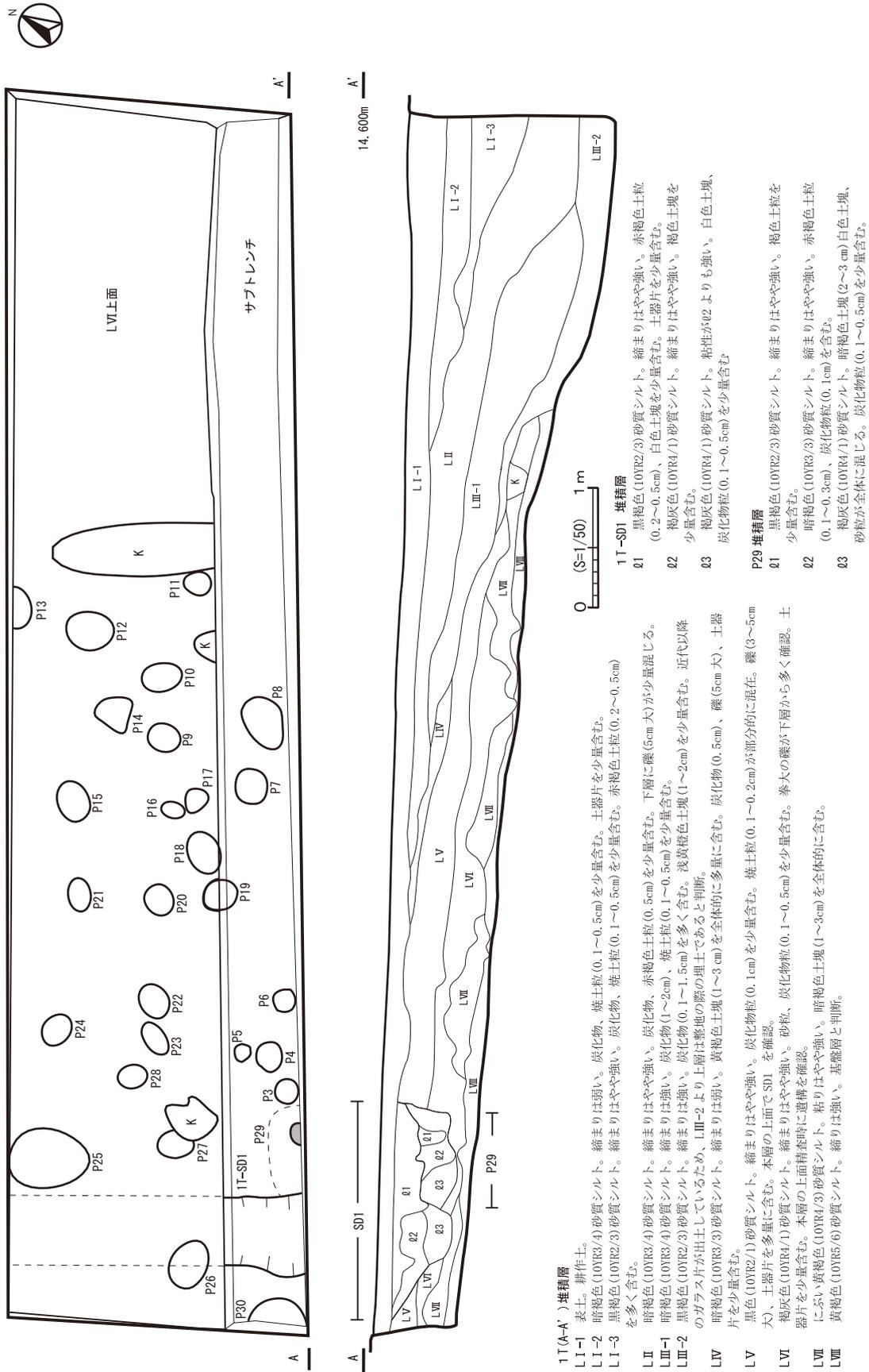
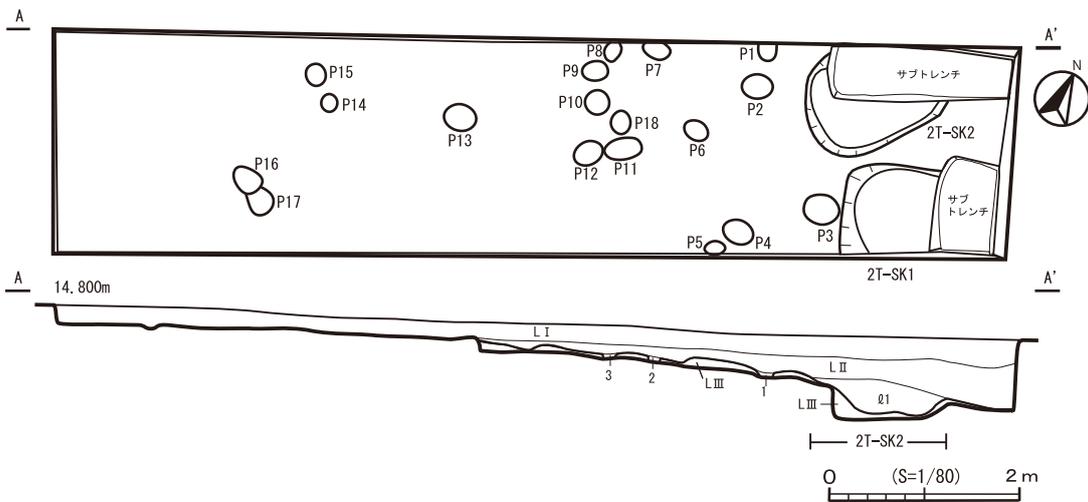


図34 1T平面図・断面図



- 2T(A-A') 堆積層
 L I 表土。耕作土。
 L II 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト。縮まりはやや弱い。砂粒が全体的に多く混じる。炭化物 (0.1~0.5cm)、礫 (2~5cm) を少量含む。
 L III 黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルト。縮まりは強い。基盤層と判断。
 2T-SK1 堆積層
 01 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト。縮まりは強い。焼土粒 (0.1~0.2cm)、炭化物塊 (0.5~1cm) を少量含む。拳大の礫も混在している。
 P1 堆積層
 1 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト。縮まりはやや強い。褐灰土粒 (0.5~1cm)、明黄褐色土塊 (1~3cm) を少量含む。
 P7 堆積層
 2 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト。縮まりはやや弱い。明黄褐色土粒 (0.2~0.3cm) を少量含む。
 P8 堆積層
 3 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト。縮まりはやや強い。小石が少量混じる。

図35 2T平面図・断面図

【4・6T】4・6Tは1・2Tより標高の低い斜面下方に位置し、標高9.5~7.2mを測る。ここでは斜面における遺物包含層等の確認を行った。

いずれのトレンチも黄褐色砂質シルトLV層で確認し、この面を基盤層とした。4Tは、トレンチ中央部より東斜面下に向かって基盤層の急激な落ち込みが確認でき、地すべり等で崩落したものと考えられる。

6Tは、東側に向かって黒褐色土(LIV層)が堆積する。調査区内の黒褐色土の深さは東端において100cmを測る。黒褐色土から遺物は出土しなかったが、分布状況から後述する7・10T等で検出した埋没谷の堆積土と考えられ、6Tはその西端になると言える。4・6Tでは遺構、遺物ともに確認していない。

【7・8・10~14T、17~19T】7・8・10~14T、17~19Tは調査対象地の東側平坦地にあたり、遺構の分布状況を確認することを目的に設定した。この調査地点の標高は5.0~7.5mを測る。南に向かって標高が高くなる。

これら調査地点はいずれも現代の宅地跡であり、表土(LI)は宅地造成による整地層である。7・8・10~14T、17~19Tでは、表土直下で黄褐色の砂質シルトが確認され、この面を基盤層と考え、遺構確認面とした。

7・10・17~19Tでは、調査区西側において表土が急激に落ち込む傾斜変換点を確認した。これらは先述の6Tの調査状況を踏まえ、南側から北側に貫入する幅約25mを測る

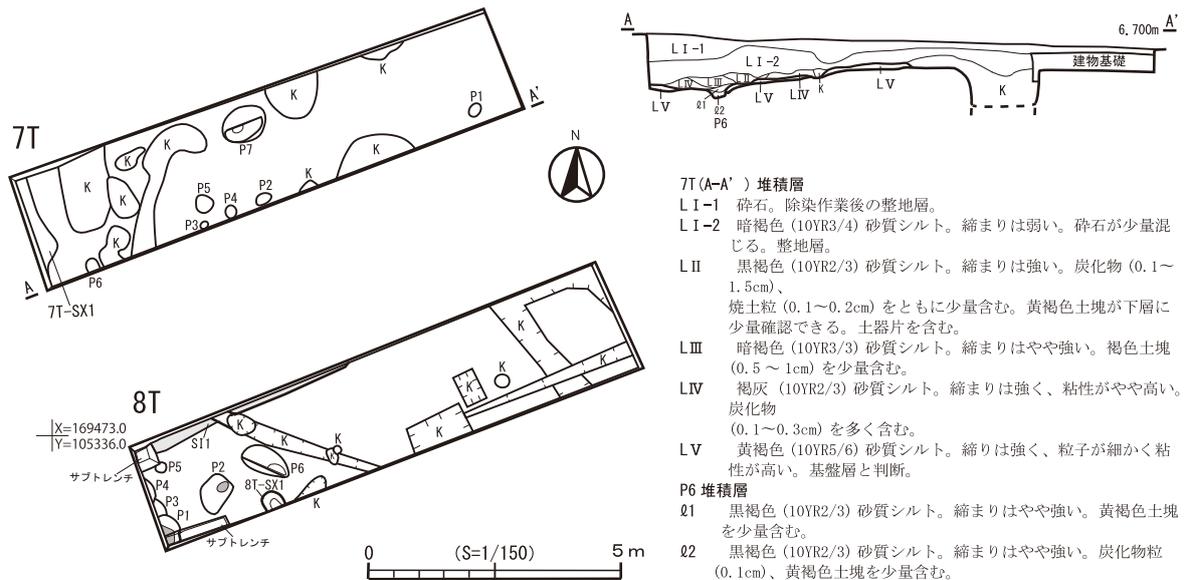


図36 7T・8T平面図・断面図

埋没谷と考えられる。

この埋没谷の東側にあたる7・8・10～14Tの調査地点は、北側の17～19T及び南側の調査対象地外より標高が高く、この埋没谷と沖積地に挟まれた約40m四方の島状に発達した微高地と考えられる。13・14Tでは遺構は確認されず、後世の削平が激しかったと考えられる。

8・10～12Tでは、竪穴住居跡を合計7軒確認された。長軸は3～5mを測る。遺構の深さ、堆積状況、時期を確認するため、重複する撈乱を掘削し、適宜サブトレンチを設けた。いずれの竪穴住居跡の覆土は10cm未満であり、遺構上面はほとんど削られて失われている状態であった。

竪穴住居跡のうち3軒 (S I 2・S I 5・S I 6) は北西方向の壁際にカマドを伴う。11TのS I 5に関しては、わずかにカマドのソデ部分の粘土と、被熱した燃焼部分が上面から確認できる。これらは黒褐色を基調とするしまりの弱い覆土で焼土や炭化物が多く認められる。S I 5からは図40-6の大洞A式が出土しているが流れ込みと考えられる。カマドが確認できないS I 1・S I 4・S I 7の住居も覆土の特徴が類似していることから同時代の住居である可能性が高い。S I 7は位置関係からS I 5と同一住居の可能性はある。

10TのS I 2の住居の壁付近に集中するピットは、覆土がS I 2の覆土と特徴が類似し、S I 2に伴う周堤等に伴う遺構であると推定する。8T-SX1は、覆土内に焼土がやや多く含まれており、カマドの煙道部である可能性がある。これらの竪穴住居跡及び関連する遺構からは土師器片は出土しているが、造営時期を確定できる土器は出土していない。

8Tで確認したピット6基のうち、P1・2は柱痕、掘方ともに明確に確認できる柱穴である。どのように遺構が組まれるか全体像は不明だが、遺構内から土師器片も出土していることから、竪穴住居跡と同時期の構築と考えられる。

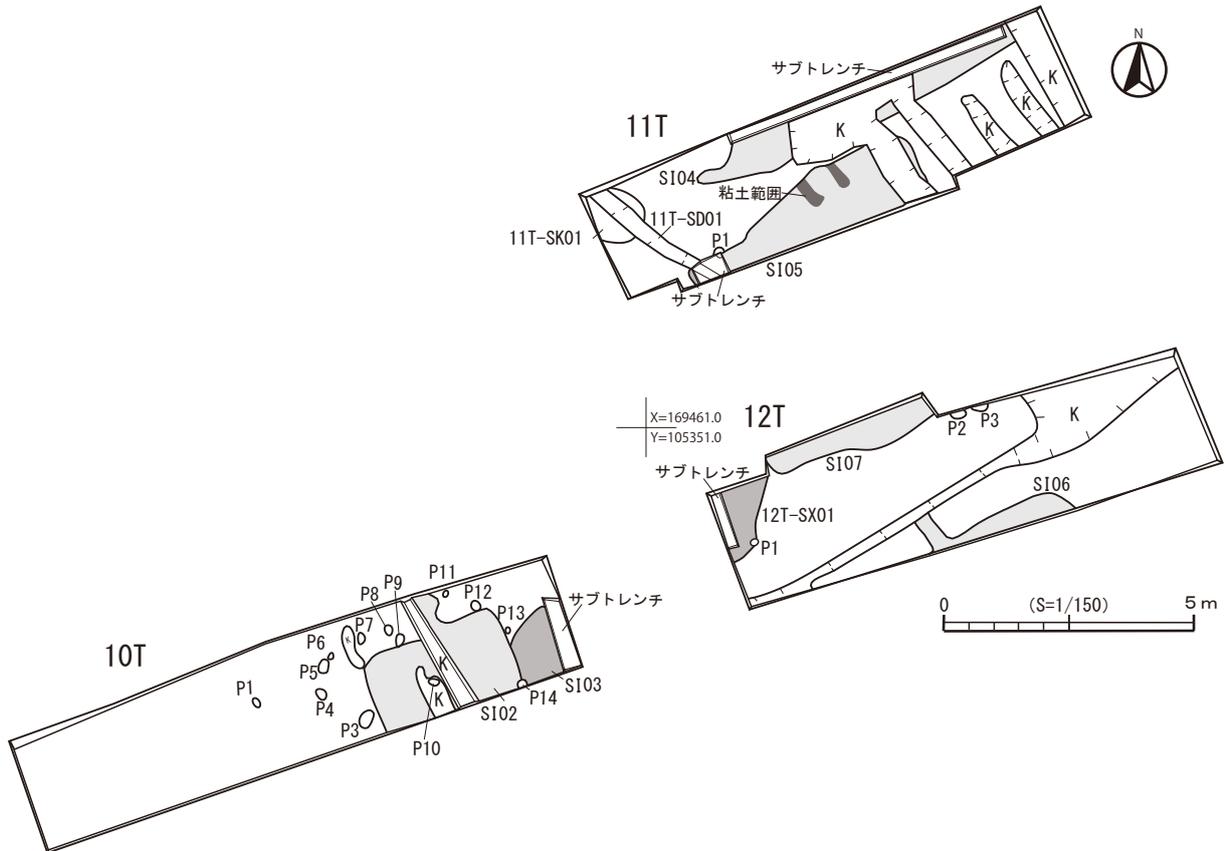


図37 10T・11T・12T平面図

11Tの調査区西端では、土坑(11T-SK1)1基、溝(11T-SD1)1条を確認した。土坑は長軸110cmを測り、掘り込んで調査をしていないが、上面から図40-20が出土した。外面には、坏部中段までヘラケズリが施され、内面には黒色処理が施されており、国分寺下層式に比定できる。11T-SD1はS15と11T-SK1を切るが、覆土の特徴がS15等の竪穴住居と類似しており、大きな時間差はないものと判断する。

このようにS11・2・4～7、8T-SK1・P1・2、11T-SK1・SD1は覆土が類似することから、同時代の遺構と考えられる。11T-SK1は出土遺物から8世紀前半の所産と考えられるが、それ以外は時期を決定できる遺物は出土していない。

これらが分布する8・10～12Tで、遺構外から出土遺物で図示できたのは、11T出土の図40-18・19である。18は須恵器の甕、19は坏部外面にヘラケズリが見られ、内面に黒色処理が施されている土師器の坏である。国分寺下層式に相当する。また、図示していない土器も非ロクロ成形の土師器を中心とし、古墳時代に比定できる土器は出土していない。これらのことから、S11等の遺構群は大きな時間差がないと考えられ、国分寺下層式期の8世紀前半を中心とする時期の可能性が高い。

これらの奈良時代の竪穴住居跡等と異なり、S13と12T-SX1の覆土は、明褐色を呈しており、しまりが強く、炭化物も極端に少ない。S13はS12より古いことが重複関係より明らかであり、φ2から図40-6のループ文が多段に配される土器が出土していることから、縄文時代前期前半の竪穴住居跡と考えられる。12T-SX1の覆土は3cm

未満であり、遺物も出土していないため、竪穴住居跡であるかどうかを判断はできなかったが、同時期の竪穴住居の粗掘りの可能性がある。

この他、7 Tでは、7 T-S X 1とピット6基を確認した。7 T-S X 1は東端の一部のみの検出であることから全体が把握できず、遺構の性格を判断することができなかった。覆土は褐灰色を呈しており、炭化物が多量に含まれていることが確認できたが、隣接する竪穴住居跡の覆土の特徴とは異なる。遺物は出土せず、年代や性格は不明である。

これらの調査結果から、縄文時代の貝塚を伴う集落が所在する段丘下方の低地域において、埋没谷の東側微高地に貝塚形成以前の縄文時代前期前半の集落と8世紀前半の集落が存在することが明らかになった。

【15・16 T】 15・16 Tは、調査対象地の北側平坦地に設定した。標高は5.0m～5.8mで、今回の調査区の中で最も標高の低い場所に位置し、17～18 Tの西側にあたる。調査区全体では表土の下に暗褐色や黒褐色土(L II・III)が検出され、17～19 T等で確認された埋没谷の堆積土と考えられる。埋没谷の堆積状況、年代等を確認するため、各調査区中央にサブトレンチを設けて調査を行った。

埋没谷の堆積土は大きく黒色を基調とするL II～IV層と、褐灰色の粘性の高い砂質シルトのL V層に大別できる。L III層から図40-17の須恵器が出土しているため、L II、L III層は古墳時代以降の堆積と考えられる。L V層では上面より縄文土器が出土している。下層からは15・16 Tともに木片などの有機物の堆積が認められた。砂が多く含まれ、ラミナ状に堆積していることが確認できるため、流水がある堆積環境であったことが推測できる。基盤層にあたる粘性土は15 Tは灰黄褐色土、16 Tはにぶい黄橙色土を呈しており、トレンチ中央部にかけては一部でグライ化している。基盤層の上面は標高4.3mを測る。

15・16 Tから出土している縄文土器は図40-3～5、7～16である。3は縄文時代中期の底部が残る浅鉢で、底面には網代状の圧痕が確認できる。4は縄文時代後期、7～15は縄文時代晩期の土器である。10は結節縄文が認められることから大洞B C式、7は地文に縄文、口縁部に矢羽状沈線文を施す大洞A式の深鉢である。9も隆帯上に刺突を施す大洞A式である。8・13は条痕文、14は櫛描文、11は網目状撚糸文、12は縄文と条痕文を上下に配する粗製土器である。16は縄文時代晩期の製塩土器である。出土した縄文時代晩期の土器は大形土器片を含むことから、現地性が高いと考えられ、L V層は縄文時代晩期以前の堆積層であり、大洞A式期を下とすると考えられる。

10. **調査のまとめ** 今回の調査により、これまで未調査だった遺跡東部の東斜面中腹から、東麓に至る範囲における遺構等の分布状況が明らかになった。低地部には南北方向の埋没谷が確認された。埋没谷の最下層では、湧水の影響がある大洞A式期の堆積層が確認され、縄文時代晩期には谷をつたって台地上からの流水があったことを示唆する。谷底面の標高は4.3mであり、縄文海進時の最高海水準より高く、海水の大きな侵入がなかったことも

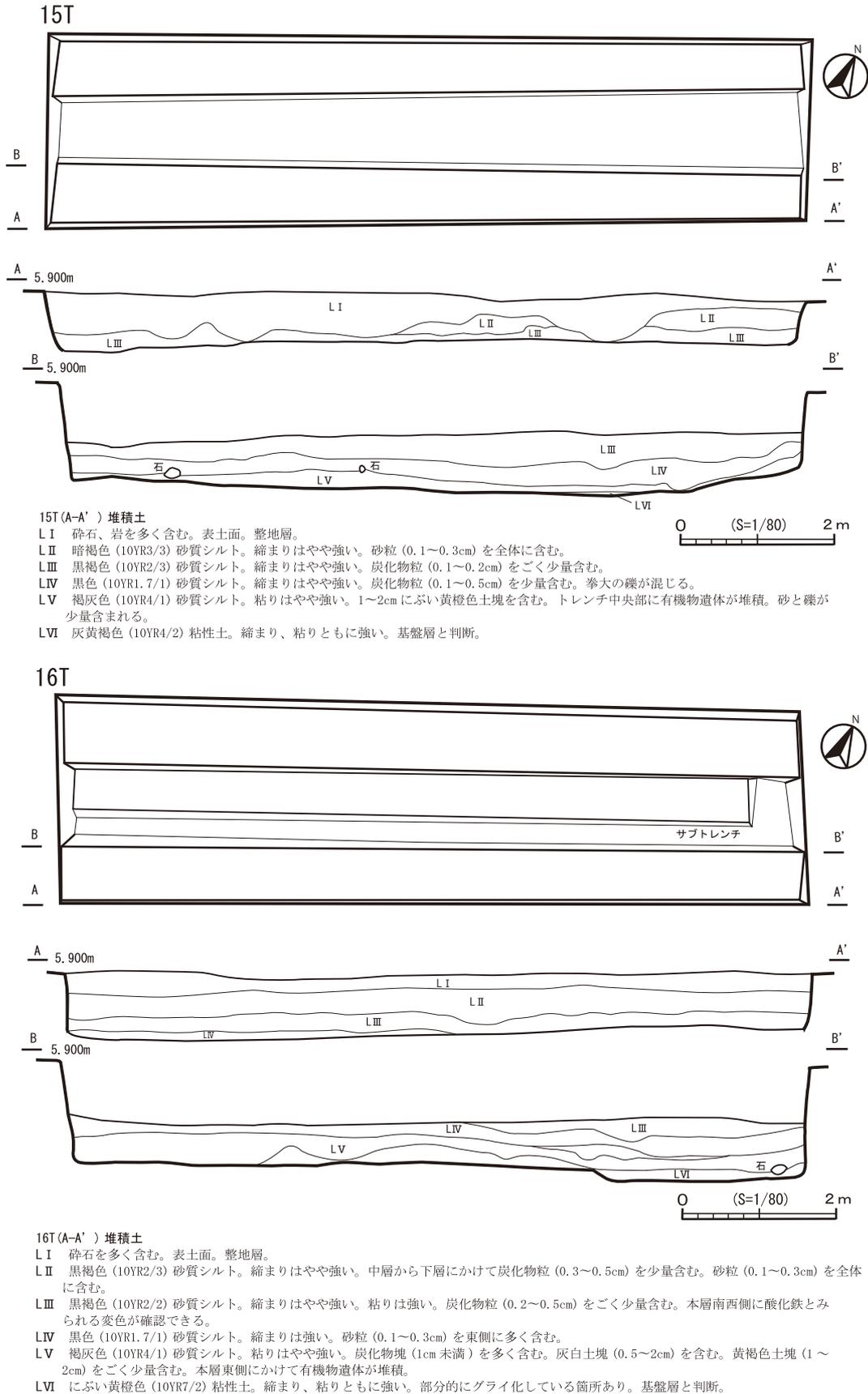


図38 15T・16T平面図・断面図



図39 遺構分布図

指摘できよう。段丘上で集落・貝塚を形成した段階では、海への入り口となる谷として利用されていたことも想定できる。

埋没谷の東側には島状に微高地が発達し、縄文時代前期前半の集落、8世紀前半を中心とした集落が確認された。縄文時代前期前半の遺物は、貝層下の堆積層、小迫南地区斜面で一定量の土器が出土しているが、明確な遺構は少ない。段丘上の本格的な集落が形成される以前に、海に面した標高の低い場所を居住地として利用していたと考えられる。

奈良時代の集落は5～6軒の住居が存在しており、土器に大きな時間差が認められないため、短期的な集落と考えられる。段丘上には平安時代の竪穴住居が確認されており、奈良時代から平安時代にかけて居住地の移動があったことを伺わせる。いずれの集落も旧井田川浦または潟湖形成以前の古宮田湾に面した集落で、海との関わりを強く意識した占地であった可能性がある。一方、この地点では、段丘上の集落や貝塚形成段階の縄文時代前期後半から晩期の遺構・遺物は明確ではなく、この時期には積極的な活動の場ではなかったことが指摘できよう。段丘斜面上位にある縄文時代の貝層や遺物包含層と、埋没谷の間の東向き斜面では縄文時代の明確な遺物包含層は確認されなかった。これらは縄文時代以後の地滑りや、近現代の人為的な造成を受けうしなわれたものとする。



写真46 調査前状況（西から）



写真48 1 T 土層断面



写真47 1 T 調査状況



写真49 1 T 土層断面



写真50 2 T 調査状況



写真51 2 T-SK 1・SK 2



写真52 7 T 調査状況



写真53 8 T 調査状況



写真54 10 T 調査状況



写真55 10 T-S I 2 調査状況



写真56 11 T 調査状況



写真57 11 T-S I 5 調査状況



写真58 12 T 調査状況



写真59 12 T-S X 1 調査状況



写真60 15 T 調査状況



写真61 15 T 土層断面



写真62 15 T 土層断面



写真63 16 T 土層断面

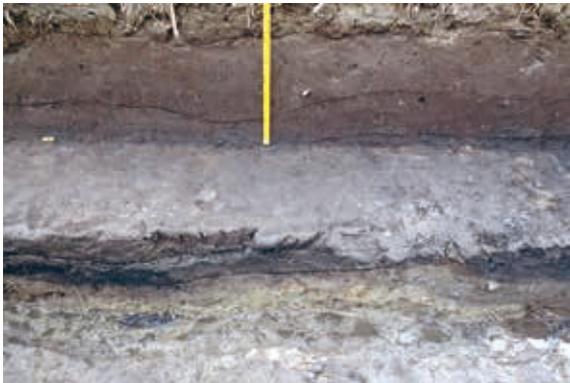


写真64 16 T 土層断面



写真65 16 T 調査状況



写真66 浦尻貝塚14次調査出土遺物

第16項 原町区深野入竜田地区

- 1. 調査原因 土砂採取
- 2. 調査地点 原町区深野字入竜田
- 3. 調査期間 平成29年11月14日
- 4. 調査対象面積 14,750m²
- 5. 調査面積 3.5m²
- 6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
文化財主事 高橋 保雄(新潟県派遣)



図41 深野入竜田地区位置図

- 7. 調査成果 今回の調査では、表面調査の段階で確認された木炭窯と考えられる窪地に幅1mの調査区を1箇所設定し、埋蔵文化財の有無の確認を行った。

調査の結果、現地表面から約70cmの深さで基盤層を確認し、土層断面の堆積状況から確認された窪地も人為的なものではなく、自然地形である可能性が高い。

- 8. 調査所見 今回の試掘調査では、保存協議を必要とする埋蔵文化財が確認されなかったことから、改めた発掘調査の必要はなく慎重工事による対応とする。

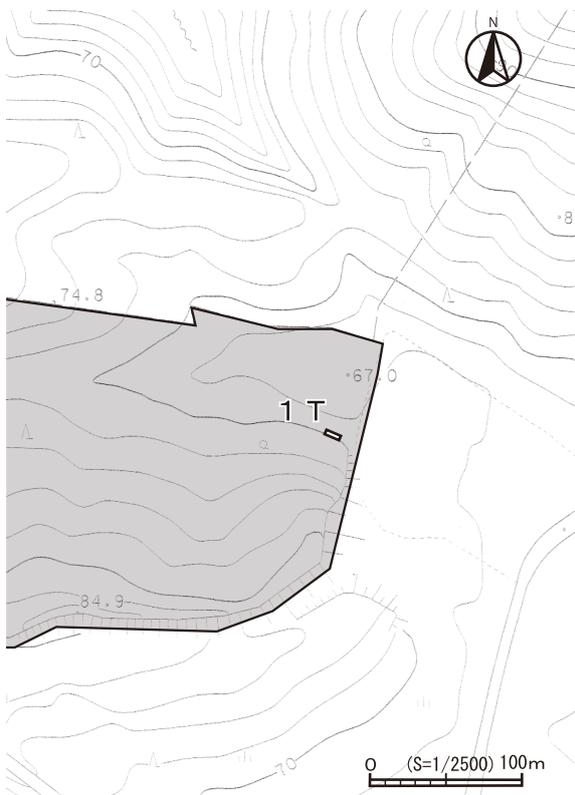


図42 調査区位置図



写真67 1 T 調査状況



写真68 1 T 調査状況

第17項 池ノ沢遺跡（1次調査）

1. 調査原因 農地造成
2. 調査地点 小高区神山字池ノ沢
3. 調査期間 平成29年11月20日
～平成30年2月1日
4. 調査対象面積 20,000m²
5. 調査面積 135.3m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 今回の調査では、表面調査の段階で確認された廃滓場を中心に、開発範囲内に調査区を49箇所設定し、廃滓場の範囲確認及び周囲の製鉄に関連した埋蔵文化財の確認を行った。

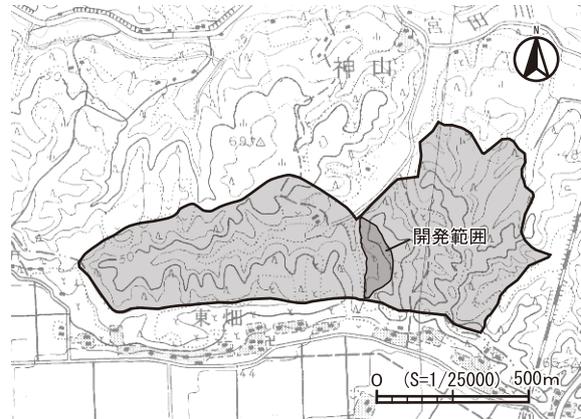


図43 池ノ沢遺跡位置図

調査の結果、開発範囲の北部、南部の谷にて廃滓場を検出、その周辺から木炭窯が確認されている。

北部の1号廃滓場は、1、2、6～9、14、15、17Tで鉄滓が出土しており、谷頭付近の12Tでは製鉄炉と考えられる遺構を確認した。廃滓場は東西約20m、南北約7mの範囲に広がっていることを確認した。廃滓場の範囲と鉄滓の出土量から、複数回の操業が行われた可能性がある。

8T、14Tにおいては、鉄滓を含む表土層を除去した結果、多量の炭化物を含む黒色土層を確認した。このことから、斜面上方において木炭窯跡が所在する可能性がある。

南部の谷に設定した44、46Tでは、試掘調査以前に行われた盛土を確認した。盛土の厚さは約1.4mを測り、その盛土を除去したところ、旧表土と考えられる層を確認した。44Tと46Tでは、旧表土の下層に鉄滓を含む層を確認した。

47Tでは、盛土の下層から多量の炭化物を含む黒色土層を確認した。このこと

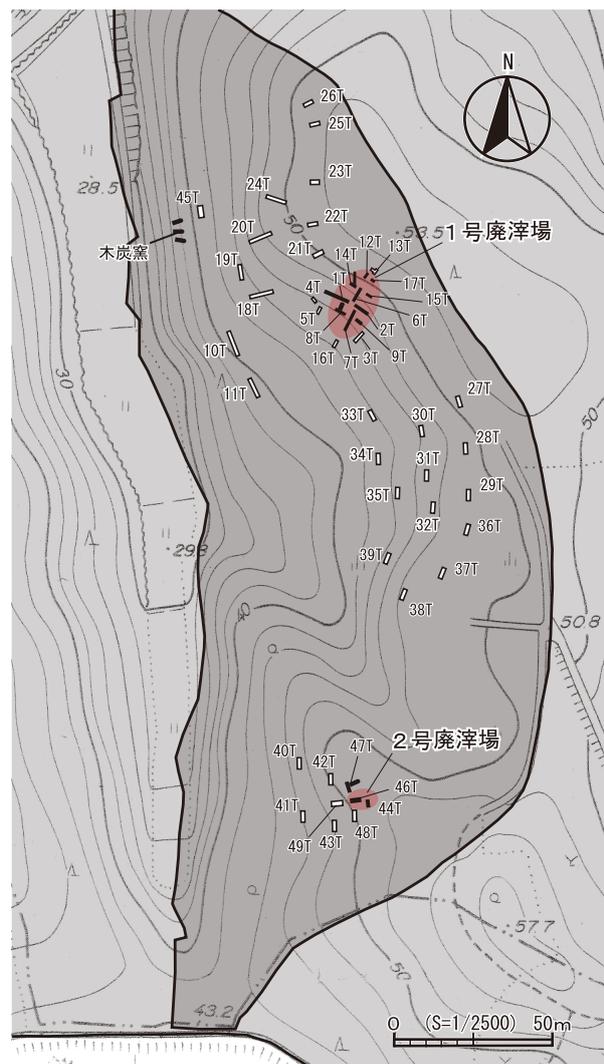


図44 調査区位置図

により、斜面上方において木炭窯跡が所在する可能性がある。

8. 調査所見 今回の調査では、北部・南部の谷において、2つの廃滓場が確認された。また、その周辺から木炭窯跡に関連すると考えられる黒色土層を検出しており、複数の製鉄関連の遺構を確認した。

遺構が確認された箇所において開発行為を行う場合は事前に保存協議を要し、保存が困難な場合には、記録保存を目的とした発掘調査が必要となる。



写真69 8 T 調査状況



写真70 7 T 廃滓場検出状況



写真71 12 T 製鉄炉跡検出状況



写真72 44 T 調査状況



写真73 44 T 廃滓場検出状況



写真74 47 T 調査状況

第18項 泉官衙遺跡 (25次調査)

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 原町区泉字宮前
3. 調査期間 平成29年12月27日
4. 調査対象面積 128.67m²
5. 調査面積 13.2m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 今回の試掘調査では、開発範囲内に調査区を1箇所設定し埋蔵文化財の確認を行った。

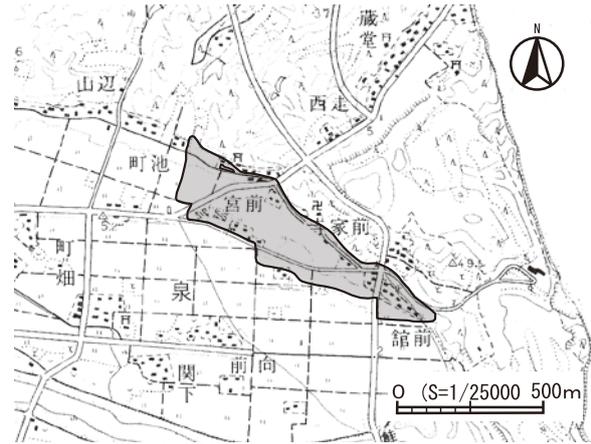


図45 泉官衙遺跡位置図

調査の結果、現地表面から約70cmの深さで遺構検出面である基盤層を確認した。調査区東側にてピットを3基、竪穴住居跡1軒を確認した。ピットの時期は不明であるが、竪穴住居跡は、検出面から出土した土師器片から古代の竪穴住居跡と考えられる。

8. 調査所見 調査結果から、開発範囲内において保存協議を要する埋蔵文化財が確認された。しかし、今回の開発計画において基礎工事による掘削が遺構検出面に到達しないことから、改めた保存協議及び発掘調査の必要はない。

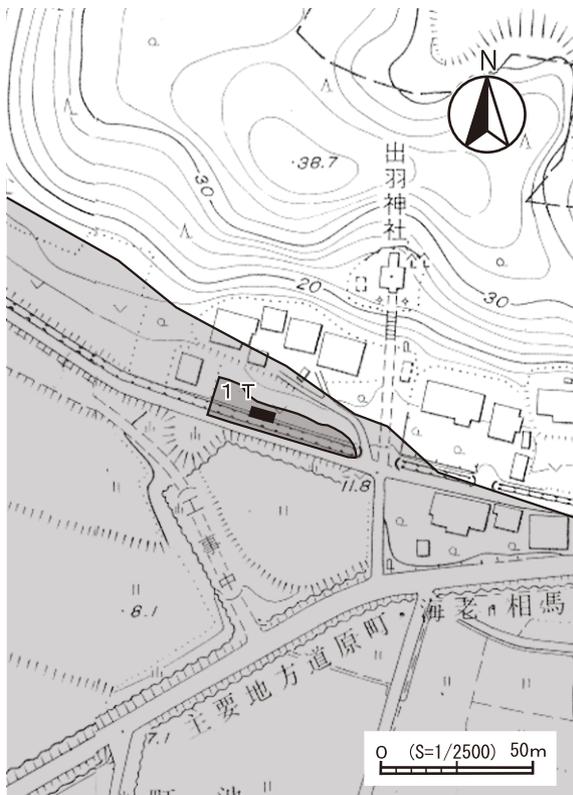


図46 調査区位置図



写真75 1 T 調査状況



写真76 1 T S I 1 検出状況

第19項 片草貝塚（1次調査）

1. 調査原因 個人住宅建設に伴う造成工事
2. 調査地点 小高区片草字金場台
3. 調査期間 平成30年1月9日
～1月31日
4. 調査対象面積 1424.35m²
5. 調査面積 9.3m²
6. 調査担当 埋蔵文化財調査員 濱須 脩
7. 調査成果 本遺跡は、個人住宅建設事業に伴う埋蔵文化財の照会により、埋蔵文化財包蔵地との照合及び現地確認の結果、開発範囲が市指定の史跡である「片草貝塚」に該当していることが確認された。

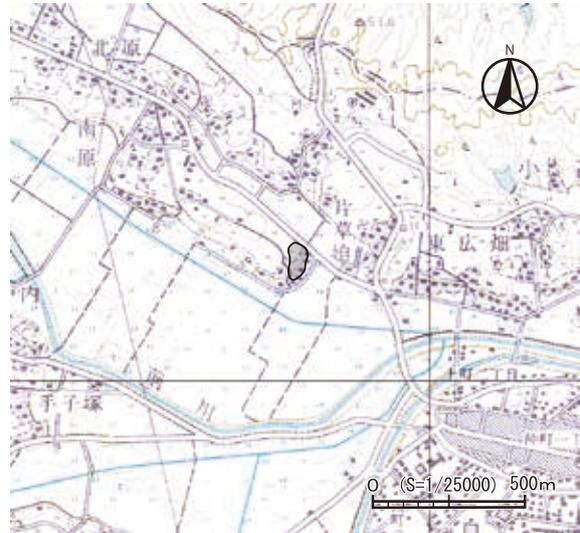


図47 片草貝塚位置図

その後、保存協議を進めた結果、今回の開発工事の施工にあたり、「片草貝塚」への影響が考えられるため、貝塚の範囲確認等を目的に試掘調査を行った。

片草貝塚は、小高川の支流である前川の北岸に広がる河岸段丘上に所在し、舌状に南東へとせり出した段丘の東端部に立地する。「片草貝塚」は市内最西端に位置する貝塚であり、縄文時代前期前半の海進の最盛期が貝塚の形成時期と考えられている。試掘調査は、開発範囲内の東斜面を対象としたが、急斜面となっているため、比較的傾斜が緩やかな箇所と段丘平坦部縁

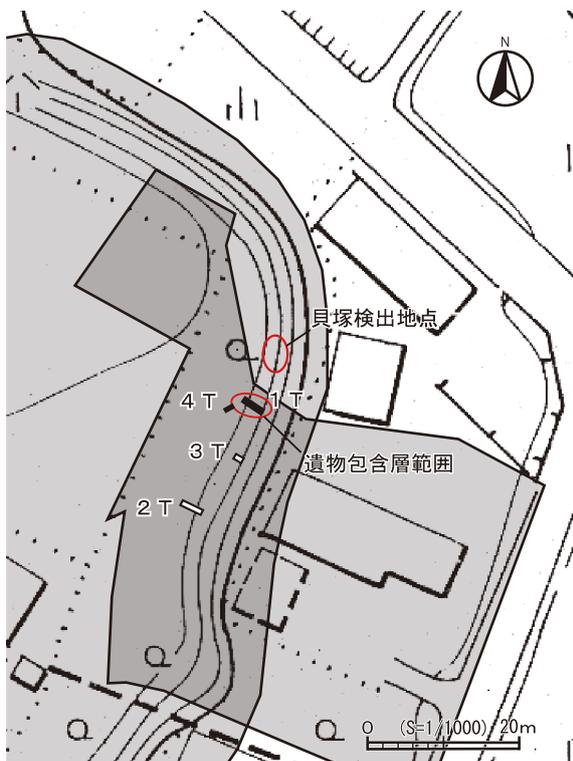


図48 調査区位置図

を中心に調査区を4箇所設定し、埋蔵文化財を確認した。

[1T] 1Tは斜面の北側、開発範囲の境界付近に設定した調査区である。北側の開発範囲外で、貝塚の一部が露出している状況が確認されたため、貝塚の範囲確認を目的として設定した。

調査では、現地表面下から約2.7mの深さまで掘削し、層位はLⅠ～LⅦ層に大別される。LⅠ層は黒褐色土で約40cm、LⅡ層は褐色土で約30cm、LⅢ層は黄褐色土で約40cmの厚さで堆積している。堆積土はシルト質であり、含有物は約1～4mmの細かい偽礫と炭化物が少量含まれ、しまりは弱い。段丘上から斜面下方に向かって堆積しており、また、堆積土の状態からLⅠ～Ⅲ層は自然堆積と考えられる。

出土遺物は、繊維を含む土器が少量出土し、LⅠ層からは近世～近代の陶器が出土した。

LⅣ層は、LⅢ層直下から約1.6mの厚さでシルト質の土が堆積し、LⅠ～Ⅲ層と比較するとしまりがやや強い。多様な色調の土が複雑な堆積状況を示し、堆積土中には偽礫と炭化物、焼土粒が混在し、部分的に集中する箇所も多数見られることから、LⅣ層を可能な限り分層し、最終的には26層に細層された。

細層したLⅣ層の各層は、暗褐色、褐色、黄褐色を基調とした堆積土である。含有物は各層ごとに大きさや量に違いが見られるが、ほとんどの層に偽礫と炭化物が含まれ、焼土粒も一部の層にて少量確認できた。各層は、短く途切れるようにブロック状に堆積する。東方への下方傾斜に応じた堆積とは異なり、地形の傾斜と反対方向に流れ込む形で堆積した層、垂直に近い縦方向に堆積した層も確認した。また、各層の間に黒色を呈する土壌化した層を挟まないことから、少量の土が連続して堆積した状況がうかがえる。遺物は、LⅣ層の各層から出土したが、特に下層から集中して出土した。

LⅣ層の堆積状況と堆積土に含まれる含有物の混入状況から、LⅣ層は自然堆積ではなく、土器の廃棄や段丘上面の削平など的人為的な堆積層の可能性が高い。

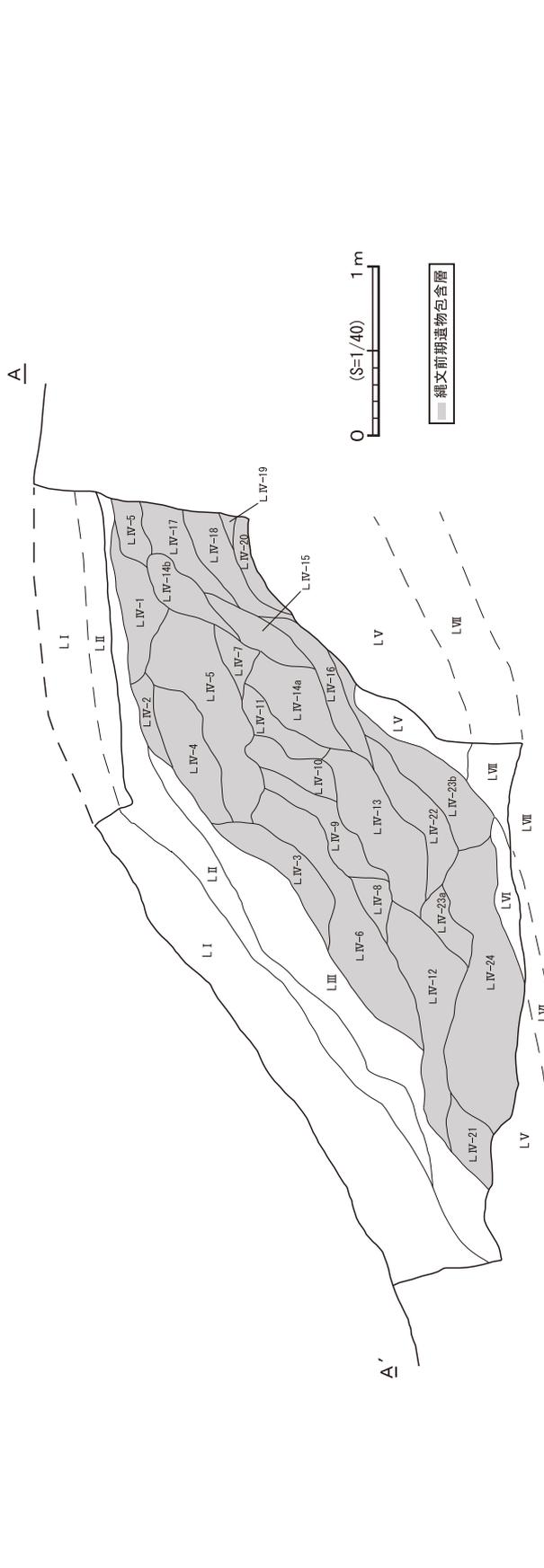
LⅤ層は、褐色を基調としたシルト質の土である。灰白色の砂岩ブロックと砂礫が多量に混入していることから、基盤層の崩落土と考えられる。LⅥ層は、暗褐色のシルト層が約10cmの深さで堆積し、遺物の出土は確認されていない。この下層から灰白色の岩盤層であるLⅦ層を確認したことから、LⅥ層が、縄文時代の包含層形成以前の土層であると考えられる。

[出土遺物] 出土遺物は、1Tから出土しており、いずれも縄文土器である。これらの土器の胎土には砂粒や繊維の混和痕が認められるものが多く、焼成は硬質、色調は暗褐色や黒褐色が大半である。

図50-2は縄文時代早期末の資料である。外面に縄文条痕、内面に条痕が見られる。LⅣ層の中層から出土しているが、1点のみの出土であり、他の層からは出土していないことから、遺物包含層の本格的な堆積以前の所産と考えられる。図50-5は、平口縁資料である。口縁上端に狭い無文部が残り、その下方に3段のループ文が施文される。大木1式に比定できる土器で、LⅣ層の下層から出土している。図50-1、3、4、6～10は、末端ループ付の縄文による文様が施された資料である。1は大形の資料であり、口縁部から体部にかけて0段多条が施され、部分的にナデが施される。胴部から口縁部にかけて直線的な立ち上がりが見られる深鉢である。3、4は口縁上端に狭い無文部が残る口縁資料で、3は部分的なナデ、4は口縁付近に補修坑が見られる。6～8は羽状縄文であり、6、7が結束縄文、8は0段多条による非結束縄文である。9は単節斜縄文が施文され、部分的なナデが見られる。10は口縁から胴部にかけての資料である。口縁上端から胴部にかけて施文され、部分的なナデが見られる。器形は、外側に向かって緩やかに立ち上がり、胴部中央で内側に向かって内湾する。いずれも大木1式に比定できる土器で、6～8はLⅣ層の上層と中層、他は下層から出土している。

図50-11、12は前々段合撚りが施文された資料である。11は口縁部資料であり、口唇部にミガキが施される。11はLⅣ層の下層、12は上層から出土した。大木1式～2a式に比定できる

図49 1 T南壁面土層断面図



L I	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	礫を少量含む。根によるカクラン有り。
L II	10YR4/4	褐色	砂質シルト	偽礫・炭化物少量、礫を多量含む。
L III	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	偽礫・炭化物・礫を少量含む。
L V	10YR4/6	褐色	砂質シルト	白色砂岩ブロック、砂礫を多量に含む。
L VI	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	旧表土の可能性有り。
L VII	10YR8/1	灰白色	岩盤層	
L IV-1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	1~2cmの偽礫・炭化物少量を含む。
L IV-2	10YR4/6	褐色	砂質シルト	5mm~1cmの偽礫少量、炭化物微量を含む。
L IV-3	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	3~5cmの偽礫・炭化物・礫を少量を含む。
L IV-4	10YR4/4	褐色	砂質シルト	5~10cmの偽礫を多量、炭化物・焼土粒を少量を含む。
L IV-5	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト	5~10cmの偽礫を多量、炭化物少量、炭化物微量を含む。
L IV-6	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	5~10cmの偽礫を多量、炭化物少量、炭化物微量を含む。
L IV-7	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	3~6cmの偽礫少量、炭化物微量を含む。
L IV-8	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	5~8cmの偽礫少量、炭化物多量を含む。
L IV-9	10YR4/4	褐色	砂質シルト	2~4cmの偽礫少量を含む。
L IV-10	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	4~6cmの偽礫・炭化物少量を含む。
L IV-11	10YR4/6	褐色	砂質シルト	2~3cmの偽礫・炭化物少量を含む。
L IV-12	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	3~7cmの偽礫・礫を少量、炭化物微量を含む。
L IV-13	10YR4/4	褐色	砂質シルト	3~5cmの偽礫が多量、炭化物少量を含む。
L IV-14a	7.5YR4/4	褐色	砂質シルト	4~5cmの偽礫・炭化物少量を含む。
L IV-14b	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	5mm~1cmの偽礫、焼土粒を少量、炭化物を多く含む。
L IV-15	10YR4/3	褐色	砂質シルト	4~5cmの偽礫・炭化物少量を含む。
L IV-16	10YR4/4	暗褐色	砂質シルト	7~8cmの偽礫少量、炭化物多量を含む。
L IV-17	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	5~7cmの偽礫少量、炭化物微量を含む。
L IV-18	10YR4/4	褐色	砂質シルト	3~5cmの偽礫少量、炭化物微量を含む。
L IV-19	10YR4/3	褐色	砂質シルト	2~5cmの偽礫少量、炭化物微量を含む。
L IV-20	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	5~7cmの偽礫少量を含む。
L IV-21	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	2~4cmの偽礫少量、砂礫を多量に含む。
L IV-22	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	3~4cmの偽礫・炭化物・白色の砂岩ブロック少量を含む。
L IV-23a	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	2~3cmの偽礫・炭化物・砂礫を少量含む。
L IV-23b	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	5~7cmの偽礫・炭化物少量を含む。
L IV-24	10YR6/4	にぶい黄褐色	砂質シルト	全体に礫が多量に混じる。L V層と同一の可能性あり。

土器である。

図51-13～16は側面にループ文が施文された資料である。13は大形の破片である。口縁は残存していないが、直線的な立ち上がりが見られることから、深鉢状を呈すると考えられる。14は上部に浅い沈線文が施文される。15と16は部分的なナデが施される。図51-17は網目状擦糸文が施文され、図51-18～21は、半截竹管や櫛歯等の工具を用いて施文されている。18は底部資料である。コンパス文と櫛歯状沈線文による波状文、押し引き沈線文が施文されている。19は突起付の波状口縁資料である。口縁上端から斜方向の押し引き沈線文と交差する網目状押し引き沈線文が施文される。交差する沈線文は、一方が沈線文と押し引き沈線文が交互に並ぶ形で5本単位で施文され、一方は6本単位で施文される。20と21は底部資料である。2点とも半截竹管による押し引き沈線文が施文され、20ではコンパス文と波状沈線文が見られる。

図51-13～21は大木2 a 式に比定できる土器で、19はLIV層の中層、他は全て下層から出土している。

図51-22は底部資料である。単節斜縄文が施文される。時期は不明であるが、同じ層の下部から出土した遺物が大木1～2 a 式に比定することから同時期のものと考えられる。

図51-23と24は、大木3式に比定できる土器である。23は2段の列点文が施文され、この2つの列点文を区画する形で半截竹管による押し引き沈線文が施文される。24は、刺突文が施文された円弧の隆線と、そこから周囲に延びる形で連続した半截竹管文が施文される。大木3式はLIV層の上層（LIV-1、2）から出土しており、これより下層においては、同時期の遺物を出土していない。

図51-25～30はL I～III層の出土遺物である。25は前々段合擦りが施文される。26は下部に側面ループ文と上部に4本の波状沈線文が施文される。27は葺瓦状擦糸文が施文され、部分的にナデが施される。28は非結束の単節羽状縄文が施される。29は波状沈線文と押し引き沈線文が施文される。30は網目状擦糸文が施文される。

出土した土器は、主にLIV層から出土しており、その大半を大木1式と大木2 a 式が占める。大木1式と大木2 a 式はLIV層の上部から下部にかけて出土しているが、大木2 a 式が下層部から出土するなど、混在している状況が確認でき、大木1式と2 a 式を層位的に分けることはできない。上層から大木3式が出土しているため、LIV層の時期は大木3式が下限であり、大木1式～3式の時期に形成された遺物包含層と考えられる。

L I～III層からも、LIV層と同様に大木1式と大木2 a 式の縄文土器が混在して出土しており、LIV層形成時の遺物と考えられる。

[2 T・3 T・4 T] 2～4 Tは、1 Tの南側に設定した調査区で、1 Tで確認された遺物包含層の広がりを確認するために設定した。2 Tは、現地表面から約30 c mの深さで段丘の基盤層と考えられる礫層を検出した。3 Tでは、現地表面から約70 c mの深さで1 Tでも確認された灰白色の岩盤層を検出した。2・3 Tでは、遺物包含層・遺物は確認されなかった。4 Tでは、現地表面から約70 c mの深さで、1 Tと同様の遺物包含層を検出した。遺物包含層は、調査区の北東壁から約40 c mの地点まで確認され、そこから南西側は広がりが確認できないため、

遺物包含層の南端と判断される。

8. 調査所見 調査結果から、「片草貝塚」の東向き斜面北部で縄文時代前期前半の遺物包含層を確認した。今回の調査では、「片草貝塚」の残存状況及び範囲を確認し、遺物包含層の形成時期と堆積状況を確認することができた。堆積土の特徴や堆積状況から、LⅣ層が人為的な堆積層の可能性がある、段丘上面の削平による廃土や土器の廃棄場の可能性が指摘できる。LⅣ層から出土した遺物は大木1式～2a式の縄文土器が主体であり、主たる形成時期を示しているが、大木3式もわずかに認められることから、大木3式期まで遺物包含層の形成が行われた可能性が高い。しかし、大木2b式が出土していないことから、中断や別箇所での大木2b～3式の遺物包含層が形成されていた可能性がある。

また、過去の調査でも、大木1～2a式の貝塚の形成が確認されており、今回の調査によって片草貝塚が大木1～2a式を中心とすることが裏付けられた。

なお、確認された遺物包含層は市指定の史跡である「片草貝塚」に関連するため、遺物包含層が確認された調査区周辺は、保護が必要となる。そのため、遺跡の損失につながる工事は原則的に許可できないが、遺物包含層に影響がない範囲及び深度での工事内容であれば、工事中の立会のもとで施工が可能と判断できる。

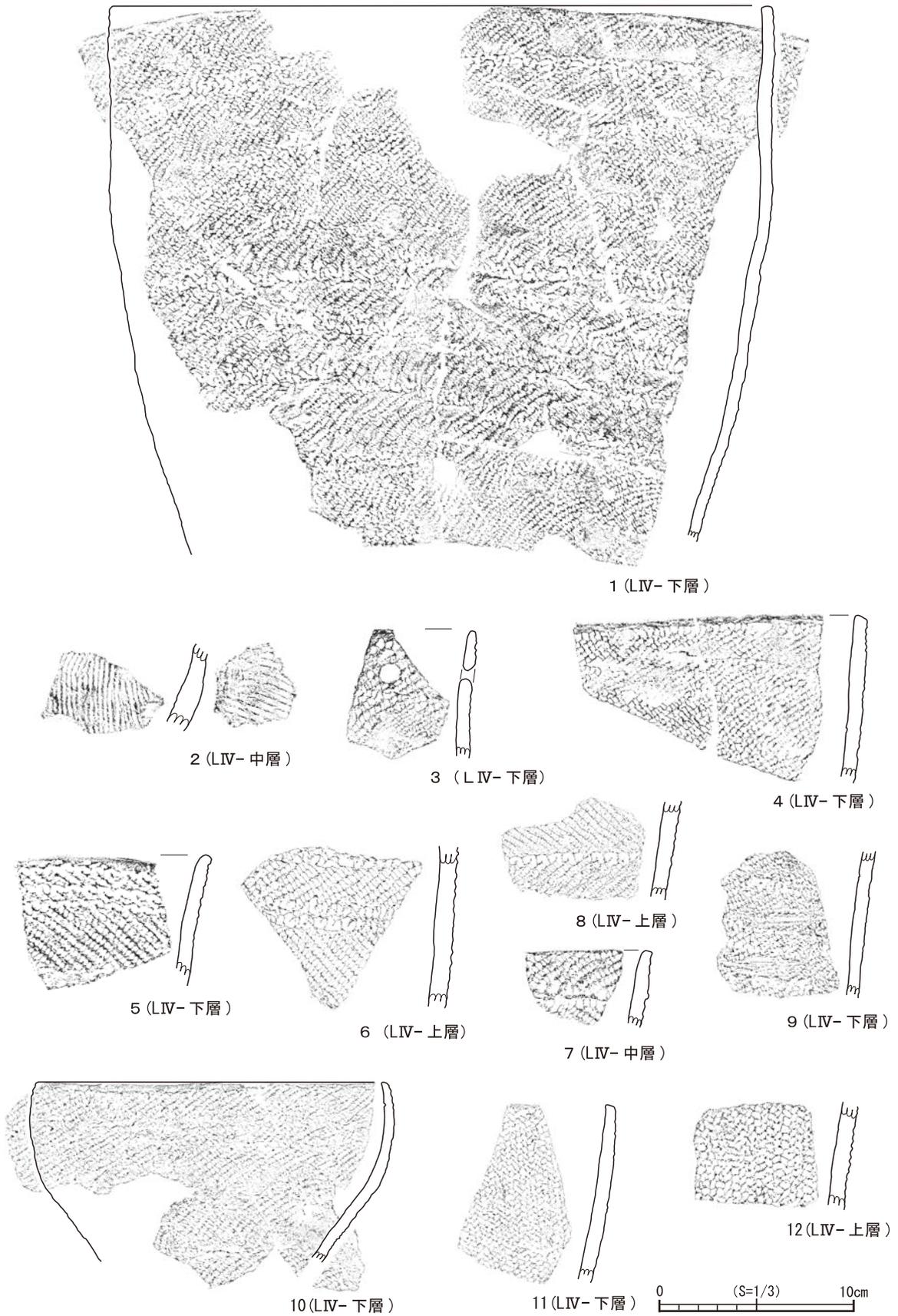


図50 片草貝塚 1 次調査出土遺物（1）

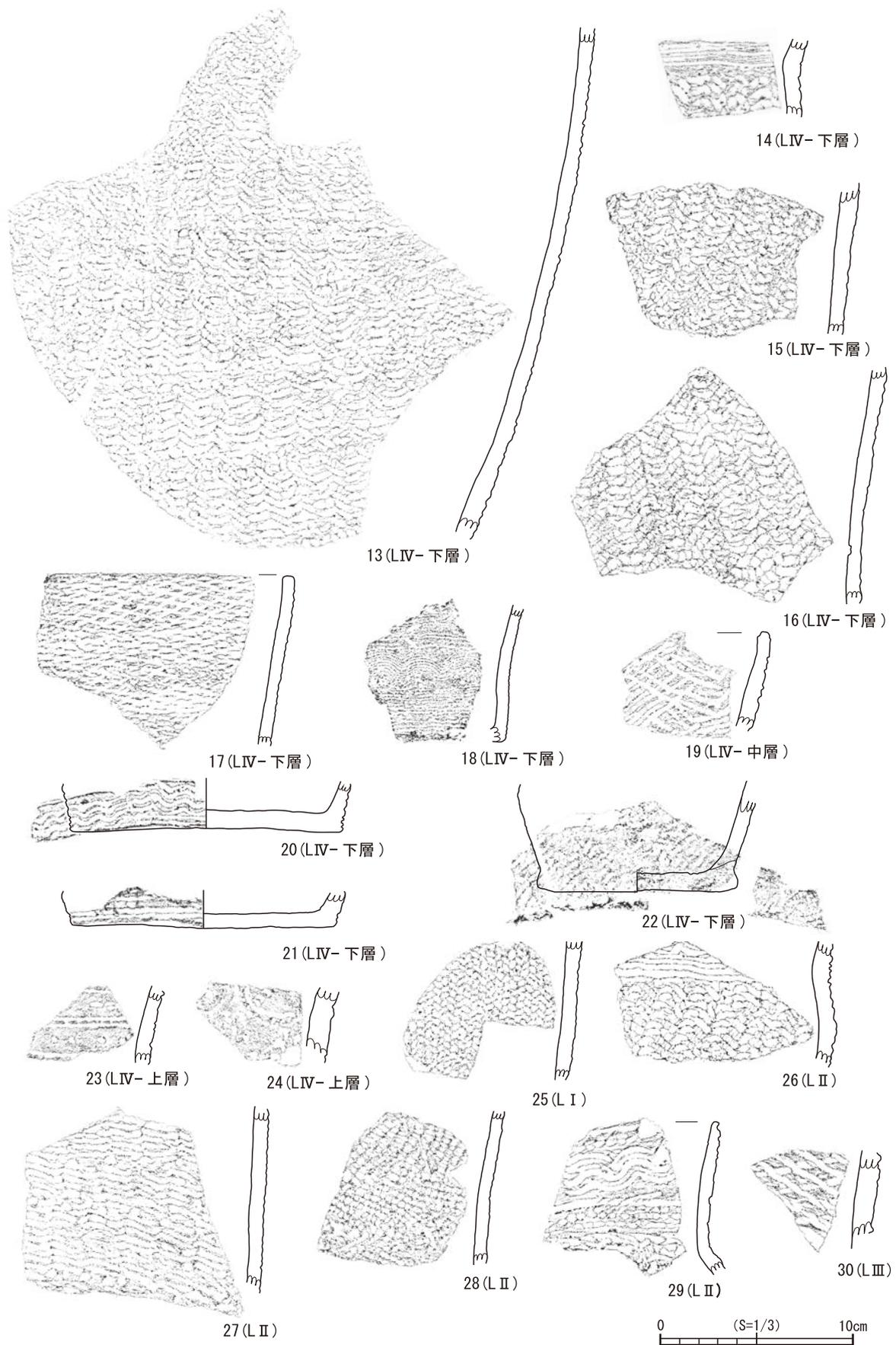


図51 片草貝塚 1次調査出土遺物 (2)



写真77 調査前状況全景（東から撮影）



写真78 1 T調査状況（北東から撮影）



写真79 1 T調査状況（北西から撮影）



写真80 1 T遺物出土状況（東から撮影）



写真81 1 T調査状況（東から撮影）



写真82 1 T L IV-12層観察（北から撮影）



写真83 1 T L IV-22層観察（北から撮影）



図 50-2



図 50-5



図 50-3



図 50-7



図 50-4



図 50-8



図 50-6



図 50-12



図 50-11



図 50-9



図 50-10



図 51-16



図 51-15



図 51-17



図 51-18



図 51-19



図 51-13



図 51-14



図 51-22



図 51-23



図 51-25



図 51-26



図 51-24



図 51-20



図 51-27



図 51-30



図 51-29



図 51-28

写真84 片草貝塚出土遺物

第20項 高見町B遺跡（5次調査）

1. 調査原因 集合住宅建設
2. 調査地点 南相馬市原町区高見町一丁目地内
3. 調査期間 平成30年1月30日
4. 調査対象面積 991m²
5. 調査面積 30m²
6. 調査担当主 査 荒 淑人
7. 調査成果 今回の集合住宅建設計画は、

建設予定敷地の南半に建物が建設され、北半部は掘削等を伴わない駐車場として利用されることから、調査区は建物が建設される箇所に長さ15m×幅2mの規模で設定し、埋蔵文化財を確認する作業を行った。

調査地は周囲の畑よりも一段高くなっていることから、盛土により嵩上げが行われていると想定された。試掘調査の結果、やはり畑耕作土の直下には1m近くの厚い盛土層があり、その直下で基盤層となる黄色ソフトロームの地山に達した。基盤層は現地表面から約1.8mの深さで確認した。

基盤層を確認する過程の中で、遺構や遺物は確認されなかった。

8. 調査所見 今回の調査地点では、保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことと、基盤層の上位に1.8mの盛土が施されており、建物基礎等の掘削は、この盛土内で収まる設計であることから、改めた保存協議は必要とせず、慎重工事による工事施工が望ましいと判断される。

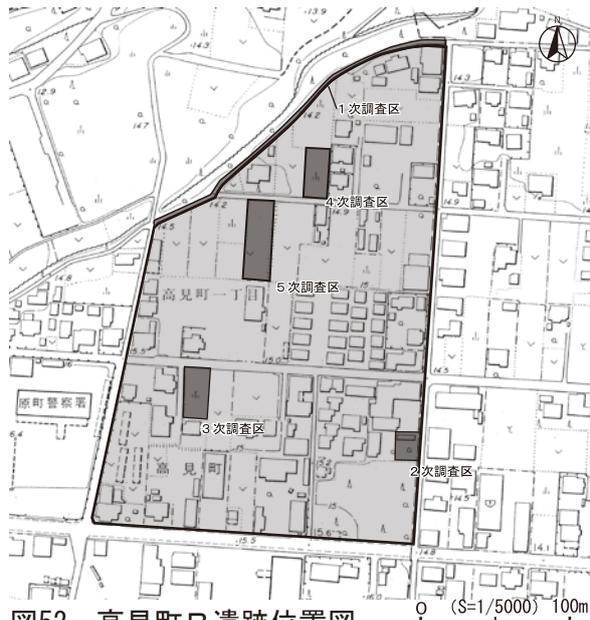


図52 高見町B遺跡位置図

0 (S=1/5000) 100m



図53 調査区位置図

0 (S=1/2500) 50m



写真85 1 T調査状況



写真86 土層断面

第21項 上根沢原畑遺跡（3次調査）

1. 調査原因 太陽光発電施設建設
2. 調査地点 南相馬市小高区上根沢字原畑地内
3. 調査期間 平成30年3月7日～3月13日
4. 調査対象面積 2,061m²
5. 調査面積 180m²
6. 調査担当主 査 荒 淑人
7. 調査成果 今回の試掘調査は、太陽光発電施設の基礎を打設する部分に、幅2m×長さ20mの調査区を3箇所

に設置して、埋蔵文化財の確認作業を行った。

現地表面の表層には厚さ5cmの碎石が敷かれており、その下

層に碎石敷き以前の表土層、基盤層直上の暗黄褐色の漸移層、そして基盤層となる黄色ソフトロームに達した。現地表面から基盤層上面までの深さは約60cmを計測した。

基盤層を確認するまでの過程において、遺構や遺物は確認されなかった。

8. 調査所見 今回の試掘調査では、改めて保存協議を要する埋蔵文化財は確認されなかったことと、太陽光発電施設の基礎掘削が基盤層まで達しない設計であることが明らかとなったことから、今後保存協議等の措置は必要とせず、慎重工事による工事施工が望ましいと判断される。

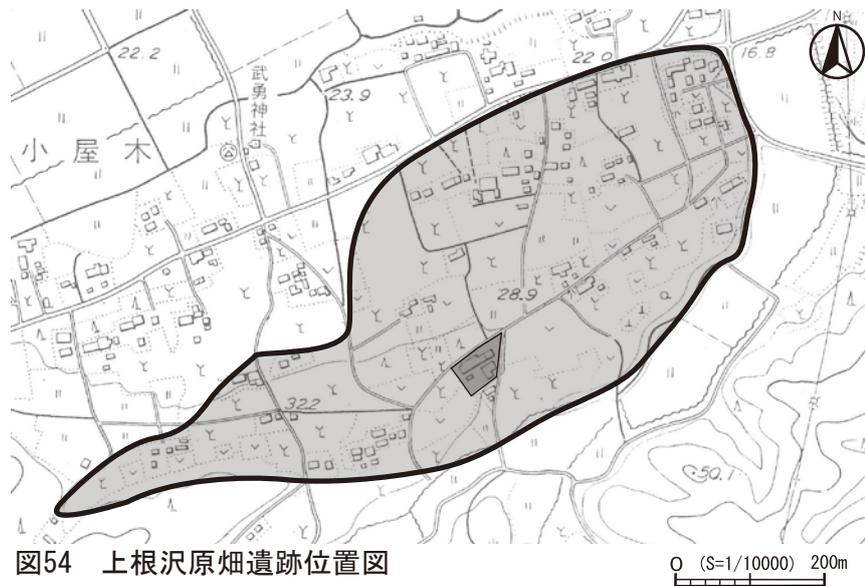


図54 上根沢原畑遺跡位置図



図55 調査区配置図



写真87 調査区近景



写真88 重機掘削状況



写真89 1 T 調査状況



写真90 1 T 土層断面



写真91 2 T 調査状況



写真92 2 T 土層断面



写真93 3 T 調査状況



写真94 3 T 土層断面

第22項 八幡林遺跡 (17次調査)

1. 調査原因 個人住宅建設
2. 調査地点 南相馬市鹿島区寺内字八幡林地内
3. 調査期間 平成30年3月13・14日
4. 調査対象面積 381m²
5. 調査面積 23m²
6. 調査担当主 査 荒 淑人
7. 調査成果 今回の住宅建設計画に対しては、建物建設位置に2m×6mの調査区を1箇所、宅地周囲に設けられる擁壁設置部分に1m×10mの調査区1ヶ所を設定して、埋蔵文化財の確認作業を行った。

1 Tでは表層に碎石が敷かれており、その下層に山砂の盛土が確認された。山砂の下層には盛土以前の畑地耕作土があり、その直下で黄色ロームの基盤層に達した。この間、遺構・遺物は確認されなかった。

2 Tは、擁壁設置部分に設けた1m×10mの調査区である。最上層には畑地盛土が80cmほどあり、その下層に盛土以前の暗褐色土が約20cmで堆積している。暗褐色土の下層には基盤層となる黄色ロームがあり、溝2条が確認された。溝は調査区の北端と南端にあり、上幅約80cm、下幅約30cm、深さ約50cmを計測し、内部の堆積土は黒色土を主体とする自然堆積土で5層に細分された。また溝内の中層にはFPと想定される火山灰の堆積が見られた。

8. 調査所見 今回の調査地点では、建物が建設される地点については、山砂等の盛土が厚く堆積しており、建物設計による基礎掘削が基盤層まで達しないことから、改めた保護措置は必要なく、慎重工事により対応することとした。

擁壁設置部分には2条の溝跡が平行して開削されており、FP火山灰が堆積している状況から未確認の古墳の可能性が示唆されたため、この部分の工事施工に際しては、工事立会いを実施して施工を行った。

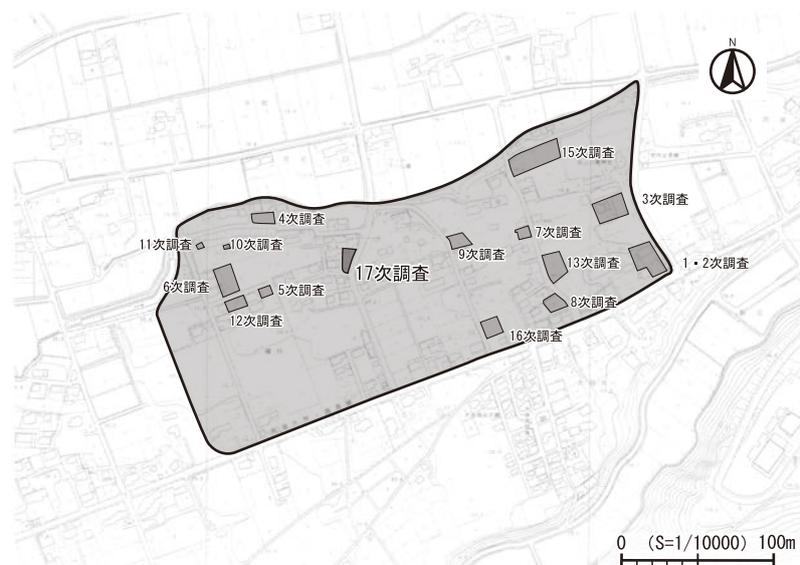


図56 八幡林遺跡位置図



図57 調査区位置図と古墳の分布



写真95 調査着手前



写真96 1 T 調査状況



写真97 2 T 調査状況（古墳周溝検出状況）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みなみそうましないいせきはつくつちょうさほうこくしょ12
書 名	南相馬市内遺跡発掘調査報告書12
副 書 名	平成29年度試掘調査報告
シ リ ー ズ 名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第28集
編 著 者 名	荒 淑 人・林 紘 太郎・濱 須 脩・小 椋 紗 貴 江
編 集 機 関	南相馬市教育委員会文化財課
所 在 地	〒975-0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地
発 行 年 月 日	西暦2019年（平成31年）3月31日

所 収 遺 跡	所 在 地	コ ー ド 町 村 号 遺 跡 番 号	北 緯 経 緯	調 査 期 間 上 下 段 着 完	面 積 (㎡)	調 査 原 因
ま の こ ふ ん ぐん 真 野 古 墳 群 A 地 区	南相馬市鹿島区寺内字 八幡林・大谷地・仏方	212500036	37° 41' 48" 140° 57' 05"	20170828 20180323	700,000.0	保 存 目 的
あ げ ま ち 遺 跡 4 次 調 査	南相馬市原町区 東町	212500170	37° 38' 31" 140° 58' 01"	20170405 20170406	54.3	集 合 住 宅 建 設
は ち 幡 林 遺 跡 16 次 調 査	南相馬市鹿島区 寺内字八幡林	212500041	37° 41' 49" 140° 57' 16"	20170411	16.5	個 人 住 宅 建 設
う お ね ざ わ は ら は た い せ き 上 根 沢 原 畑 遺 跡 1 次 調 査	南相馬市小高区 上根沢字原下	212500540	37° 32' 49" 140° 58' 16"	20170410	4.3	個 人 住 宅 建 設
さ ぎ 内 遺 跡 5 次 調 査	南相馬市鹿島区 寺内字鷺内	212500101	37° 42' 03" 140° 57' 59"	20170425 20170523	120.0	県 立 特 別 支 援 学 校 建 設
な し の き し た に し た て あ と 梨 木 下 西 館 跡 4 次 調 査	南相馬市原町区 雫字塔場下	212500304	37° 36' 44" 141° 00' 09"	20170519 20170529	39.7	個 人 農 地 造 成
よ つ 栗 遺 跡 2 次 調 査	南相馬市小高区 川房字四ツ栗	212500544	37° 32' 05" 140° 56' 42"	20170613 20170614	12.0	太 陽 光 発 電 施 設 建 設
び く に さ わ い せ き 比 丘 尼 沢 B 遺 跡 1 次 調 査	南相馬市原町区 上北高平字比丘尼沢	212500724	37° 39' 55" 140° 58' 26"	20170606 20170726	107.4	土 砂 採 取 事 業
お だ か く か み や き 小 高 区 神 山 長 畑 地 区	南相馬市小高区 神山字長畑	212500723	37° 31' 26" 140° 58' 09"	20170726 20170810	14.9	土 砂 採 取 事 業
きた み うち 遺 跡 2 次 調 査	南相馬市原町区 石神字北明内	212500699	37° 37' 44" 140° 55' 50"	20170807 20170810	163.8	土 砂 採 取 事 業
う お ね ざ わ は ら は た い せ き 上 根 沢 原 畑 遺 跡 2 次 調 査	南相馬市小高区 上根沢字堂北	212500540	37° 32' 51" 140° 58' 22"	20180828	18.0	個 人 住 宅 建 設
お お と み に し は た い せ き 大 富 西 畑 遺 跡 1 次 調 査	南相馬市小高区 大富字東畑	212500464	37° 33' 47" 140° 55' 35"	20180829 20180830	50.0	民 間 介 護 施 設 建 設
ひ が し さ く 遺 跡 1 次 調 査	南相馬市小高区 上根沢字東迫	212500726	37° 32' 26" 140° 58' 35"	20170824 20171025	215.5	土 砂 採 取 事 業
お だ か じ ょう 跡 5 次 調 査	南相馬市小高区 小高字城下	212500460	37° 34' 04" 140° 59' 25"	20170921	3.8	個 人 住 宅 建 設
う ら 尻 貝 塚 14 次 調 査	南相馬市小高区 浦尻字台ノ前	212500500	37° 31' 17" 141° 01' 30"	20170920 20171110	320.0	保 存 目 的

所 収 遺 跡	所 在 地	一 町 村 番 号	北 緯 緯 度	調 査 期 間	面 積 (m ²)	調 査 原 因
原 町 区 深 野 区 入 竜 田 地 区	南相馬市原町区 深野字入竜田	—	37° 40' 53" 140° 55' 27"	20171114	3.5	土砂採取事業
池 ノ 沢 遺 跡 1 次 調 査	南相馬市小高区 神山字池ノ沢	212500628	37° 31' 10" 140° 58' 07"	20171120 20180201	135.3	土砂採取事業
泉 官 衙 遺 跡 25 次 調 査	南相馬市原町区 泉字宮前	212500227	37° 39' 04" 140° 58' 07"	20171227	13.2	個人住宅建設
片 草 貝 塚 1 次 調 査	南相馬市小高区 片草字金場台	212500454	37° 34' 13" 140° 58' 43"	20180109 20180131	9.3	個人住宅建設
高 見 町 B 遺 跡 5 次 調 査	南相馬市原町区 高見町1丁目	212500346	37° 38' 23" 140° 59' 18"	20180130	30.0	集合住宅建設
上 根 沢 原 畑 遺 跡 3 次 調 査	南相馬市小高区 上根沢字原畑	212500540	37° 32' 41" 140° 58' 10"	20180307 20180312	180.0	太陽光発電施設建設
八 幡 林 遺 跡 17 次 調 査	南相馬市鹿島区 寺内字八幡林	212500041	37° 41' 51" 140° 57' 08"	20180314	23.0	個人住宅建設

所 収 遺 跡	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
真 野 古 墳 群 区 A 地	古墳	古墳	古墳		国指定史跡
東 町 遺 跡 調 査 4 次	集落跡、散布地	縄文・奈良～平安	竪穴住居跡、小穴	土師器、須恵器	
八 幡 林 遺 跡 調 査 16 次	散布地、集落跡	縄文～古墳	なし	なし	
上 根 沢 原 畑 遺 跡 調 査 1 次	散布地	弥生～平安	小穴	なし	
鷺 内 遺 跡 調 査 5 次	散布地、集落跡、官衙跡	縄文・平安	なし	なし	
梨 木 下 西 館 跡 調 査 4 次	集落跡、城館跡、製鉄跡	古墳～中世	竪穴住居跡、小穴	土師器、須恵器	
四 ツ 栗 遺 跡 調 査 2 次	散布地	縄文・平安	なし	なし	
比 丘 尼 沢 B 遺 跡 調 査 1 次	製鉄跡	奈良～平安	木炭窯、廃滓場	羽口、炉壁、鉄滓	
小 高 区 神 山 区 長 畑 地 区	製鉄跡	奈良～平安	木炭窯、廃滓場	羽口、炉壁、鉄滓	
北 明 内 遺 跡 調 査 2 次	製鉄跡	奈良～平安	なし	なし	
上 根 沢 原 畑 遺 跡 調 査 2 次	散布地	弥生～平安	小穴	なし	
大 富 西 畑 遺 跡 調 査 1 次	散布地	縄文・平安	なし	なし	
東 迫 遺 跡 調 査 1 次	製鉄跡	奈良～平安	製鉄炉、木炭窯、廃滓場	羽口、炉壁、鉄滓	
小 高 次 城 跡 調 査 5 次	集落跡、城館跡	奈良～近世	なし	なし	
浦 尻 貝 塚 遺 跡 調 査 14 次	貝塚、散布地、集落跡	縄文～平安	竪穴住居跡、ピット、包含層	縄文土器、土師器、須恵器	国指定史跡
原 町 区 深 野 区 入 竜 田 地 区	—	—	なし	なし	

所 収 遺 跡	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
池ノ沢遺跡 1次調査	製鉄跡	奈良～平安	なし	なし	
泉官衙遺跡 25次調査	集落跡、官衙跡	奈良～平安	竪穴住居跡	土師器、須恵器	
片草貝塚 1次調査	貝塚	縄文	包含層	縄文土器	
高見町B遺跡 5次調査	散布地	縄文～平安	なし	なし	
上根沢原畑遺跡 3次調査	散布地	弥生～平安	なし	なし	
八幡林遺跡 17次調査	散布地、集落跡	縄文～古墳	周溝	なし	

印刷 2019年 3月29日
発行 2019年 3月29日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第28集
南相馬市内遺跡発掘調査報告書12
—平成29年度試掘調査報告—

編集 南相馬市教育委員会 文化財課
発行 南相馬市教育委員会
〒975 - 0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地

印刷 有限会社 愛原印刷所
〒975 - 0003 福島県南相馬市原町区栄町一丁目8番地
